HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	西フリジア語の文法構造 : 代名詞
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大學文學部紀要, 45(2), 79-176
Issue Date	1997-01-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33676
Type	bulletin (article)
File Information	45(2)_PL79-176.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 45-2 (1997)

西フリジア語の文法構造 ── 代名詞 ──

清 水 誠

Struktuer fan it Westerlauwersk Frysk

── foarnamwurd ──

(*The Annual Report on Cultural Science* 45-2 (No.89). The Faculty of Letters. Hokkaido University. Sapporo. Japan. 1996. ISSN 0437-6668)

SHIMIZU Makoto

Ⅳ 代名詞 (it foarnamwurd)

§36 人称代名詞 (it persoanlik foarnamwurd) 概観

(1) まとめ

人称代名詞には主格と目的格の区別があり，それぞれに発音上の区別に基づく「基本形」と「弱形」がある。2人称には単数で「親称」と「敬称」の区別があるが，ドイツ語やオランダ語とちがって複数では区別しない (§37)。

主格には2人称親称単数 (-o/-e (←-do/-de)) と3人称単数男性／両性 (er) で特別な「連接形」(it klitik) があり，その用法は定動詞や補文導入要素 (補文標識 dat/-t を伴った従属接続詞，関係詞，間接疑問文の疑問詞) の直後に限られる。連接形は北フリジア語や東フリジア語 (Seeltersk) にも見られ，フリジア語群に共通している。2人称親称単数の連接形 -o/-e (←-do/-de) は，上記の補文導入要素の語末に添えられた-st とともに，

-sto/-ste として現われる。この -sto/-ste はそれぞれ -st-do/-st-de が縮まった形であり，人称代名詞の部分は -o/-e（←-do/-de）である。したがって，-st は人称代名詞ではなく，定動詞（do kom-st「君は来る」）の変化語尾 -st と同様に，補文標識（dat，-t）に添えられた変化語尾であるといえる。つまり，西フリジア語では主語が 2 人称親称単数の場合に補文標識が定動詞と同様に「活用」する。また，-sto/-ste の部分は人称代名詞連接形 -o/-e（←-do/-de）を欠いた -st でもさしつかえない。つまり，西フリジア語では 2 人称親称単数代名詞の主語を欠く文が可能である（§ 38）。

西フリジア語には歴史的に北海ゲルマン語の特徴として，再帰代名詞としての特別な語形がない。ただし，3 人称代名詞のなかには再帰的用法と非再帰的用法で語形が異なるものがあり，h-系の代名詞を再帰的用法に転用している（§ 39）。

「私の」などを意味する形は「§ 40　所有代名詞」として扱う。また，疑問代名詞は便宜上，疑問副詞を含めて「§ 43　疑問詞」と「§ 44　疑問文」で扱い，同様に関係代名詞は便宜上，関係副詞を含めて「§ 45　関係詞」と「§ 46　関係文」で扱う。

(2)　語形

(a)　主格

〈単数〉	基本形	弱形	連接形
1 人称	ik [Ik]/ikke [Íkə]	'k [k]	
2 人称親称	do [do:u]（dû [du]）		-ǫ [o:u]/-e [ə] （← do/-de）
2 人称敬称	jo [jo:u]	je [jə]	
3 人称男性/両性	hy [hɛi，hi]（hij [hɛi]）		er [ər]
女性	sy [sɛi，si]（sij [sɛi]）	se [sə]	
	hja [ja]（hju [jə]）		
中性	it [ət]	't [t]	

〈複数〉

1人称	wy [vɛi, vi] (wij [vɛi])	wy [vi] we [və]
2人称	jim(me) [jÍm(ə)]	
3人称	sy [sɛi, si] (sij [sɛi]) hja [ja] (hju [jə])	se [sə]

(b) 目的格

	基本形	弱形
〈単数〉		
1人称	my [mɛi, mi] (mij [mɛi])	my [mi]
2人称親称	dy [dɛi, di] (dij [dɛi])	dy [di]
2人称敬称	jo [jo:u]	je [jə]
3人称男性/両性	him [hIm]	him [əm]
女性	har [har] 〈人，定，再帰的・非再帰的〉	se [sə] 〈人・物事，定・不定，非再帰的〉
中性	it [ət] 〈非再帰的〉 him [hIm] 〈再帰的〉	't [t] 〈非再帰的〉 him [əm] 〈再帰的〉
〈複数〉		
1人称	ûs [ys]	
2人称	jim(me) [jÍm(ə)]	
3人称	har(ren) [hár(ən)] 〈人，定，再帰的〉	se [sə] 〈人・物事，定・不定，非再帰的〉

(3) 解説

(a) -y で終わる基本形の発音

-y で終わる一連の基本形の発音はクラーイ方言 (Klaaifrysk) で hy [hɛi], sy [sɛi], wy [vɛi], my [mɛi], dy [dɛi] (それぞれ hij, sij, wij, mij, dij とつづることもある) であり，ヴォーデン方言 (Wald-

frysk）で hy [hi]，sy [si]，wy [vi]，my [mi]，dy [di] である（§ 22）。

☞ 母音 [i] を示すヴォーデン方言の発音のほうが歴史的には古い（§ 6 (2) (b)）。

(b)　2 人称代名詞

2 人称親称単数主格基本形の dû [du] はヴォーデン方言（Wâldfrysk）の語形である。また，連接形 -de は単独では現われず，-st の直後に添えて -ste としてのみ現われる。

☞ Visser（1988 a：178）には de [də] が単独で現われるという指摘がある。

☞ Hoekema (1992: 17)は 2 人称親称単数主格連接形として -stû という語形も認めている。

☞ Tiersma（1985：65）は 2 人称複数弱形として jim を認めている。

(c)　3 人称代名詞

3 人称代名詞の男性と女性の区別は，自然性の区別（男の人，女の人）のほかに文法性の区別も表わす（§ 37 (4)(a)，(b)）。単数女性主格の基本型 hju [jə] はヴォーデン方言（Wâldfrysk）の語形である。

☞ 3 人称単数女性目的格の弱形として Tiersma（1985：65）は har [ər] を認めている。しかし，Visser（1988 a：178）はこれを否定している。Hoekema（1992：18），Boersma/Van der Woude（1980²：29）にもこの har [ər] は記載がない。

☞ 3 人称単数男性・中性（再帰的用法）目的格の弱形として Hoekema（1992：18）は 'm というつづりを認めている。

it [ət] はあいまい母音 [ə] を含み，アクセントを置いて強調する場合には使えない。その場合には指示代名詞 dat を用いる（§ 41 (2)(a)⑤）。その他の基本形はアクセントをもつことができる。

(d)　人称代名詞の再帰的用法（§ 39）

3 人称複数目的格の se は再帰的用法では用いず，しかも，典型的な他動詞の直接目的語と能動態の間接目的語に限られる。3 人称単数女性目的格の se にも同様の制限を認める話者が多い。ただし，意味的には両者は人と物

事をともに示すことができる。これにたいして，基本形の har(ren)（複数形目的格）と har（単数形目的格）は再帰的にも用いることができ，心理動詞の目的語やいわゆる「自由な与格」としても用いられるが，意味的には定(bepaald）の人を示すことしかできない（§ 37 (6)）。

3 人称中性単数目的格の it は再帰的用法では用いず，物事を示す場合には him を用いる。人を示す場合には，自然性に応じて him（男の人，例. it jonkje「男の子」），har（女の人，例. it famke「女の子」）を用いる（§ 39 (3)）。

§ 37 人称代名詞の基本形（de folle foarm）と弱形（de toanswakke foarm）

(1) まとめ

人称代名詞の基本形と弱形は発音上の区別に基づいており，つづりでは部分的にしか区別しない。基本形のつづりであっても，弱形の発音をすることもある。基本形ははっきり発音する必要がある場合に用い，文中だけでなく，単独でも用いることができる。弱形はとくに強調する必要がない場合に用い，単独では用いない。弱形は直前（前接的 enklitysk）か直後（後接的 proklitysk）に他の語があることを必要とし，その語とともに続けて発音する点で「連接形」(it klitik）としての性格がある（§ 38 (1)）。

1 人称単数主格には基本形に ik [Ik] とさらに強調の度合いが強い ikke [Íkə] のふたつがある。弱形 'k [k] では母音 [I] を除く発音になる。

ús [ys], do [do:u] (dû [du]), hy [hɛi, hi], har [har] には弱形がない。また，hja [ja] には語形的に直接対応する弱形がない。3 人称複数目的格と 3 人称単数女性目的格では，弱形 se [sə] に語形的に直接対応する基本形がない。

(2) 1 人称（de earste persoan）

ikke [Íkə] は単独でとくに強調する場合に用いることが多い。

"Wy binne oan 't iten." "*Ikke* net mear!"「私たちは今，食事の最中だ」

「私はもうすんだぞ」(ULI'S, C 3：8)

Net *ikke*, mar do diest it.「私じゃなくて，君がそれをしたんだ」(ULI'S, B 19：18)

☞ -e を伴った一連の強調形に注意。
ditte (← dit)「これ」, datte (← dat)「それ，あれ」, watte (← wat)「何」, hjirre (← hjir)「ここに」, dêre (← dêr)「そこに，あそこに」, wêre (← wêr)「どこに」

ik [Ik] の弱形 'k [k] は会話的な文章で 'k というつづりが見られる。
As bern *bin 'k* al begûn postsegels te sammeljen.「私はもう子供のころから切手を集めはじめた」('k は先行する bin に連接する。前接的) (ULI'S, A 19：7)

次の用例では文頭の 'k が小文字のままで，Wit から大文字書きをしていることに注意。
'k Wit it net.「私はそれは知らない」('k は後続する Wit に連接する。後接的)
'k *Sil* it dwaan.「私がそれをやりましょう」('k は後続する Sil に連接する。後接的)

☞ この場合，英語では助動詞が直前の人称代名詞に連接することに注意。
I'll do it. (← I will)「同上」

☞ 't (← it) の場合も同様 ((4)(d))。

(3) 2 人称 (de twadde persoan)

(a) 親称と敬称

2 人称単数には親称主格 do [do:u] (dû [du]), 目的格 dy [dɛi, di] (dij [dɛi]) と敬称主格・目的格 jo [jo:u], je [jə] の区別がある。敬称は形式的な手紙や古風な文章では大文字 (Jo, Je) で書くことがある。

西フリジア語では敬称は話者の内輪の領域からはずれた人のみならず，一般に年上の人に敬意や距離感を表わすときに用いる。したがって，親は子供にたいして親称を用いるが，ふつう子供は親にたいして親称は用いない ((b))。神にたいしても親称は用いない。つまり，内と外の区別だけではなく，上下の区別も表わすといえる。親称は友人，恋人，夫婦間 (ただし，③)，話者と同等ないし年下の人にたいして用いる。親称は蔑称として用いられることもある。

今日ではもっぱら単数の意味で用いる敬称 jo，je は複数形に由来し，主語の場合，定動詞は複数形になる。

{jo (je)/jim(me)} komme「{あなたは/あなたがたは} 来る」

⇔ do komst「君は来る」

☞ 西フリジア語の 2 人称親称代名詞 do（dû）はドイツ語の du やオランダ語の jij，je よりも使用範囲が狭い。De Boer（1985/1986）には統計資料を交えた詳細な記述がある。

☞ 複数形としては親称と敬称の区別なく jimme を用いる。オランダ語には複数形としても親称 jullie と敬称 u（単数形と同形。3 人称単数形に由来。Uw Edelheid＞Uwê＞Ûwe＞u）の区別がある。敬称の対象となるべき相手に jimme を用いることに抵抗を感じる話者のなかには jo をあえて用いることがあり，その結果，オランダ語に近づくことになる（De Boer 1986：25）。今日では親称の使用範囲も徐々に拡大する傾向にある。

☞ jo，je はオランダ語の jij [jɛi]，je [jə]（今日では親称）にあたる jy（← y）の対格および与格に由来する（エ.you）。jy は今日では用いない。jimme はオランダ語の jullie（← gij「あなた」+lieden「人々」）と同様に gi「あなた」+man「人」から派生したものである（Sytstra/Hof 1925：107 f.）。

① 会話での敬称と親称の使い分け

西フリジア語では初対面の人や年上の人に気軽に親称で話しかけることは稀である。年齢の上下によっても会話の相手どうしは親称と敬称を使い分ける。

A：Fytsmakker, soene *jo* myn fyts goed neisjen wolle? Hy docht it net sa bêst. It stjoer sit wat los en it seal kin ek wol wat fêster.

B：Jawis wol.(...) Sjoch, der sit ek in skuor yn 'e efterbân. *Do* kinst better in nije fyts keapje.

A：「自転車屋さん，ぼくの自転車をよく見てもらえませんか？ どうも調子が良くないんです。ハンドルはぐらぐらするし，サドルももう少しすわりが良いはずなんですけど」（子供のせりふ）

B：「いいとも。（…）ごらん，後ろの車輪も破れているよ。新しい自転車を買ったほうがいいんじゃないかね」（以上 ULI'S，A 18：10 変更）

② 神にたいして

神（God）にたいしては敬称を用いる（§ 40 (2)(c)）。

Us Heit yn 'e himel, lit *jo* namme hillige wurde, lit *jo* keninkryk komme, lit *jo* wil dien wurde op ierde likegoed as yn 'e himel. (...) [want *jowes* is it keninkryk en de krêft en de hearlikheid oant yn ivichheid. Amen.]「天にましますわれらが父よ，御名を崇めさせたまえ。御国を来らせたまえ。御心の天になるごとく，地にも来らせたまえ。(…) [国と力と栄えとは永遠に汝のものなればなり。アーメン]（Bibel 1989² (1978), Mattêus 6：9-13）

☞ 以前は神にたいして do を用いることがあった（WFT 10 (1993：76)）。

③ 夫婦間

以前は夫婦のあいだで敬称を用いることがあった（Fokkema 1967²：48；WFT 4 (1987：48)）。ただし，今日ではほとんど親称を用いるようになっている（De Boer 1986：112）。

☞ 夫婦のあいだで敬称を用いるのは 1850 年頃から見られ，1910 年以降，減少し，1945 年以降は急速に衰退した（De Boer 1986：9）。以前はフリースラントの北部よりも南部で敬称の使用が多かったという方言差が指摘されている。また，夫が妻よりもとくに年齢が高い場合には，夫が妻にたいして親称を用い，妻が夫にたいして敬称を用いることがあったという（ib. 45）。

(b) 親族名称による 2 人称の表現

子供が両親や年上の親族（兄，姉を除く）にたいして親称を用いることはほとんどなく，敬称の使用も多くない（Van der Woude 1981：27）。この場合には親族名称の使用がもっともふつうである。親族名称による 2 人称の表現は本来，年上の親族にたいする敬意の表現だが，同時に親しみの感情を表現するとも言える。たとえば義理の父や母にたいしてのように，距離感が大きくなると敬称を用いることが多くなる（De Boer 1986：73）。年下か同等の親族には親称を用いる。

☞ この点は日本語に似ている。

Oh, blikje, ik moat noadich nei skoalle. Hat *mem* myn iten klear?「いけない，もう学校に行かなくちゃ。お母さん，お弁当はできた？」(ULI'S, C 3：8)

Dat kin *mem* sels wol sjen.「それはお母さんが自分で見ればいいじゃない」(ULI'S, C 3：9)

次の会話を参照。ただし，最後の Mem「母」のせりふは夫に親族名称 Heit「お父さん」を用いている。

Soan：*Heit* is hjoed 80 jier wurden.

Heit：Ja, jonge, ik bin âld. Us heit is 60 jier wurden en ús mem noch net 55.

Mem：It is hjoed in feestdei, it is *dyn* jierdei.

Soan：*Mem* hat gelyk, hjoed skynt de sinne.

Heit：Is *dyn* frou hjir ek?

Soan：Ja, wis, sy hat hjir dochs al by *jo* sitten.

Mem：*Heit* ferjit wolris wat, der binne ek sa'n soad minsken; de famylje groeit.

息子：「お父さんも今日で 80 歳ですね」

父：「ああ，もう年だ。わしの父親は 60 で亡くなったし，母親は 55 にもならなかった」

母：「今日はお祝いなんですから。あなたのお誕生日ですよ」

息子：「お母さんの言うとおりですよ，いいお天気ですし」

父：「お前の嫁もここにいるのか」

息子：「ええ，いますよ。さっきとなりにすわっていたでしょう」

母：「お父さんはときどき物忘れをしますからね，いろいろ人が来てるし。家族も増えるものですから」(以上 ULI'S. A 1：10 変更)

☞ 上記の会話で息子のせりふとして "Ja, wis, sy hat hjir dochs al by *jo* sitten."「ええ，いますよ。さっきとなりにすわっていたでしょう」とあるが，この jo は heit のほうが自然だという判定が多い。

☞ broer「兄弟」，suster「姉妹」をそれぞれ「兄」，「姉」の意味で 2 人称の

表現とすることはない。つまり，同等の親族という扱いを受けている。この点は日本語と異なる。

*Komt {*broer/suster*} ek mei?「{お兄さん/お姉さん} もいっしょに来る？」

☞ 最近では両親にたいして親称 do を用いる傾向も増えてきている（WFT 10（1993：76））。

(c) 身分，職業などによる 2 人称の表現

相手が年上である場合には，相手の職業・身分の名称を直接用いて話しかけることがある。職業や身分の名称を用いると，敬称の人称代名詞よりも敬意が強まる。この場合，相手の名前を用いると親しみの感情がこめられる傾向がある（Tiersma 1985：63）。

☞ この点は日本語と似ている。

Hoefolle sipels wol *mefrou* ha, mefrou?「タマネギはどのくらいにいたしましょうか，奥さん」（ULI'S，B 3：7）

Dy gielige bedoelt *mefrou*? Dat binne wichters, lytse prûmkes eins. Jo kinne der hearlike jam fan meitsje.「あの黄色っぽいやつですか。あれはヴィフテルといいまして，プラムの小さなやつのことです。良いジャムができますよ」（ib.）

Wol *dokter* my even helpe?「先生（＝医者）は手伝っていただけますか」（Boersma/Van der Woude 1980²：30）

Wol *Aaltsje* my even helpe?「アールチェは手伝ってくれるかね」

子供にたいしては 3 人称代名詞を使って次のように言うことがある。

Hy moat stil wêze.「静かにしてね」（男の子に向かって）（Hoekstra/Tiersma 1994：515）

Kom *sy* mar by mem.「ママのところにいらっしゃい」（女の子に向かって）（Boersma/Van der Woude 1980²：68）

☞ 年上の相手にたいして相手の職業・身分の名称を直接用いる表現は，今日では少なくなってきている。この場合には敬称 jo を用いる話者が多い（De Boer 1986：112）。

(d)　2人称親称主格単数形 do（dû）の省略（§38(4)）

2人称親称主格単数形では基本形 do（dû）と連接形 -o/-e（←-do/-de）の両方を省略することがある。

"*Do bist* siik," sei de frou. "*Do hast* de gryp. Juster *wiest*-Ø ek al ferkâlden, en no *hast*-Ø koarts. Ø *Silst* wol gjin iten ha wolle, tink".
「あなたは病気なのよ」と彼の妻は言った。「あなたは風邪をひいているのよ。昨日からもうひいていて，今，熱が出てきたのよ。食事をとる気はないでしょうね」(ULI'S，A 6：8 変更)

(4)　3人称（de tredde persoan）

3人称代名詞は単数で自然性（男の人/女の人/物事）だけでなく，文法性（両性・中性）の区別も表わす。文や句など文法性のないものを受けるときには中性単数形を用いる。

☞ とくに物事を示す名詞句の場合，かわりに指示代名詞 dy（中性単数以外），dat（中性単数）を用いて名詞句を明確に指し示すことがある（§41(2)(a)③）。

非人称の it については(5)，har(ren) と se の相違については(6)で別に扱う。

(a)　男性形/両性形

hy［hɛi，hi］は男性の人だけでなく，両性名詞単数形も受ける。目的格 him［hIm］の弱形は［h］の音が弱いために脱落して him［əm］という発音になる。

Dy trui is prachtich. Mar *hy* makket wat dik.「そのセーターはすてきね。でも，少し太って見える」(hy＝dy trui「そのセーター」)（Bangma 1993²：30 変更）

De moade sil *him* grif oanpasse oan bepaalde maatskiplike feroaringen.「流行は特定の社会的変化にも適応するだろう」(him＝de moade「流行」)（ULI'S，C 11：5）

(b) 女性形

① hja [ja] (hju [jə]) と sy [sɛi, si]

正書法で h- で始まる女性形の単数・複数主格 hja (hju) は文語的であり，日常会話ではオランダ語 zij の借用語である sy を用いることが多い。弱形には sy に対応する se [sə] しかない。目的格 har [har] の弱形には se [sə] しかなく，しかもこの se [sə] は再帰的用法では用いない (§ 39 (3)(b)②)。

② 抽象名詞を受ける女性形

女性形はふつう女性の人を受ける場合に限られる。ただし，書き言葉，とくに古めかしい文章では，オランダ語と同様に抽象名詞などを女性形で受けることがある (§ 29 (1))。

Yn dizze jierren (...) begjint *syn wrâldskôging har* stadichoan te foarmjen.「この何年かのあいだに (…) 彼の世界観が徐々に形成されはじめる」(har＝syn wrâldskôging「彼の世界観」) (Spenter 1970：185)

所有代名詞 (§ 40) でも同様である。

De 19de ieu komt no ek geastlik oan *har* ein.「19 世紀は今やその精神においてもその終焉を迎える」(har＝de *19de ieu*「19 世紀」) (ib. 185 変更)

③ 弱形 se [sə]「彼女，彼(女)ら」の有声化

§ 19 (3)(b)で述べたように，弱形 se [sə]「彼女，彼(女)ら」は母音，有声子音，'{長母音/二重母音}＋無声摩擦音' の直後では se [zə] と発音する。用例は同箇所を参照。

☞ 次の用例のように，ze とつづる文章も散見されるが，西フリジア語では z- は語頭に来ないので，正書法としては好ましくない。
De lytse bern binne nijsgjirrich nei dat moaie boek. Hja hawwe lekkere kola fan beppe krigen. As de glêzen leech binne, meie *ze* it boek besjen.「小さな子供たちはそのきれいな本を見たくてたまりません。子供たちはおじいさんからおいしいコーラをもらいました。コップが空になったら，その本を見てもいいのです」(ULI'S, A 11：2)

(c) 人を示す中性名詞

it jonkje「男の子」, it famke「女の子」, it fanke「小娘（蔑称）」, it wiif「女（蔑称）, 妻」などは中性名詞だが, 人間を指すので, 代名詞で受ける場合には中性形ではなく, 男性形か女性形を用いるのがふつうである。

Syn wiif moast *har* op krukken rêde.「彼の妻は杖にすがらなければならなかった」(har＝syn wiif「彼の妻」) (Spenter 1970：183 変更)

所有代名詞（§ 40）でも同様である。

It famke skriuwt yn *har* deiboek.「その女の子は日記をつける」(har＝it famke「その女の子」) (ULI'S, B 10：17)

(d) 中性形

it [ət] の弱形 't [t] のつづりは会話的な文章で見られる。

Op de fjirde dei fan septimber *is 't* by ûs feest.「9 月 4 日は私たちのところではお祭りです」('t は先行する is に連接する。前接的) (ULI'S, A 17：16)

文頭の 't は小文字のままで, Is から大文字書きをすることに注意。

't Is hiel romantysk.「それはとてもロマンティックだ」('t は後続する Is に連接する。後接的) (Bangma 1993²：69)

☞ この場合, 英語では口語で助動詞や be 動詞が直前の人称代名詞に連接することに注意。
It's very romantic. (← It is)「同上」
上記の西フリジア語のような表現は英語では詩などの文学作品に多い ('tis ← it is)。

☞ 'k (← ik) の場合も同様 ((2))。

it はさまざまな名詞や要素を受ける。ただし, アクセントを置いて強調することはできず, その場合には dat で代用する (§ 41 (2)(a)⑤)。非人称構文にも it を用いるが, これは(5)で扱う。

① 中性名詞句単数形

Us pake krijt in tût en *in presintsje*. *It* is in moai boek oer it âlde Fryslân.「祖父はキスを受け, プレゼントをもらいます。それは昔のフリースラントについての美しい本です」(it＝in presintsje「プレゼン

ト」）（ULI'S，A 1：13 変更）

② 複数形名詞句

Dy wenten wurde net iens permanint bewenne. *It* binne allegear twadde wenten.「あの家々はずっと人が住むものではない。すべてセカンドハウスだ」（it＝dy wenten「あの家々」）（ULI'S，B 11：15 変更）

No sille wy *de oanwizende en freegjende foarnamwurden* noch besprekke. *It* binne wurdsjes dy't in soad opinoar lykje en maklik trochinoar helle wurde.「さて今度は指示代名詞と疑問代名詞を論じてみましょう。互いによく似ていて混同しやすい語です」（it＝de oanwizende en freegjende foarnamwurden「指示代名詞と疑問代名詞」）（ULI'S，A 14：15）

☞ オランダ語とドイツ語も同様。

オ．*Het* zijn moeilijke woorden.「それはむずかしい語（複数形）です」

ド．*Es* sind schwere Wörter.「同上」

③ 句や文などさまざまな要素

Ja, dat wit ik wol, mar ik woe in dei te winkeljen. *De bern moatte noadich wat nije klean ha.* En wy ek, as *it* my net mist.「ええ，それはわかっているけれど，でも，いつか買い物に行く日にしたいの。子供たちは新しい服が必要だし。それに，思い違いでなかったら，私たちもそうでしょう」（ULI'S，A 4：8）

☞ 次の表現に注意。

Dat mist dy.「それは君の思い違いだ」（Zantema 1984：620）

"Der is ien by de doar. *Wa is dêr?*" "Ik bin *it*, de post."「玄関のところにだれかいるわ。そこにいるのはどなたですか」「（それは）私です。郵便配達の者ですが」（Bosma-Banning 1981[2]：11）

☞ it が主語になる英語との相違に注意。

フ．Ik bin it.「（それは）私です」

オ．Ik ben het.「同上」

ド．Ich bin es.「同上」

⇔ エ．It's me.「同上」

④ 不定詞句や文を受けてあらかじめ示しておく場合

It is tige slim (*om*) *in parkearplak te finen*.「駐車場を見つけるのはとてもむずかしい」(ULI'S，A 8：11 変更)

☞ om は不定詞句を導く補文標識である。この om は省略できる。

It muoit my *dat ik it sizze moat*.「私はそのことを言わなければならないのが残念だ」(ULI'S，B 2：13 変更)

it は文中では現われなくてもいい。

Tige slim is {*it*/Ø} (*om*) *in parkearplak te finen*.「同上」

My muoit {*it* /Ø} *dat ik it sizze moat*.「同上」

Se tinke dat {*it*/Ø} tige slim is (*om*) *in parkearplak te finen*.「彼らは駐車場を見つけるのはとてもむずかしいと思っている」

Se tinke dat {*it*/Ø} my muoit *dat ik it sizze moat*.「彼らは私がそのことを言わなければならないのは残念なのだろうと思っている」

不定詞句や文の後では it は現われることができない。

(*Om*) *in parkearplak te finen* is {**it*/Ø} tige slim.「駐車場を見つけるのはとてもむずかしい」

Dat ik it sizze moat, muoit {**it*/Ø} my.「そのことを言わなければならないのは残念だ」

(5) 非人称構文

受けたり指示したりするものがなく，天候，日時，季節，行事，状況，慣用句，心理・生理現象などの表現で用いる it を非人称の it という。非人称の it を用いた構文を非人称構文という。もっぱら非人称構文で用いる動詞を非人称動詞という。非人称の it は文中でもなくてはならない。

☞ ドイツ語などに見られる「虚辞の es」に対応するのは der (§ 58) である (オ．er)。

(a) 非人称構文の種類

① 天候，日時，季節

Soe *it* noch lang {snije/reine}?「まだずっと{雪/雨}が続くのだろうか」(ULI'S, A 9：7 変更)

No is *it* al healwei fiven.「もう 4 時半だ」

Hjoed is *it* sneon.「今日は土曜日だ」

It is winter.「冬です」

② 行事，状況 ((b)の用例も参照)

Juster wie *it* ús mem har jierdei.「昨日は母の誕生日だった」

Hoe giet *it* mei jo?「お元気ですか」

Op 'e merk is *it* gesellich.「市場は楽しい」(ULI'S, A 4：11 変更)

Op it skoalplein is *it* stil.「校庭はひっそりしている」(ULI'S, B 5：10 変更)

③ 心理・生理現象

It gong hâr kald troch de lea.「彼女の心は衝撃を受けた（＝彼女の手足に寒気が走った）」(Zantema 1984：7076)

It dûzelt my yn 'e holle.「私は頭がくらくらする」(Visser 1985：173)

My dûzelt {*it*/*Ø} yn 'e holle.「同上」

☞ ドイツ語の es とちがって，文中でも西フリジア語の it やオランダ語の het はなくてはならないことに注意。

オ．Mij duizelt {het/*Ø} in het hoofd.「同上」

ド．{Mir/Mich} schwindelt {**es*/Ø} im Kopf.「同上」

次の表現に注意。

フ．My dûzelt de holle.「同上」(Visser 1985：173 変更)

*Myn holle dûzelt.「同上」

オ．Mij duizelt het hoofd.「同上」

*Mijn hoofd duizelt.「同上」

ド．Mir schwindelt der Kopf.「同上」

Mein Kopf schwindelt.「同上」

次の表現は心理・生理現象ではなく，天候の表現である。

Winters is {*it*/*Ø} my te kâld.「冬は私には寒すぎる」(ULI'S,

A 19：7 変更)

心理・生理現象の表現として「寒い」と言う場合には，非人称構文ではなく，de fuotsjes「足」，it jonkje「その男の子」を主語として表わす。

De fuotsjes binne him kâld, mar hy hâldt fol.「彼は足が寒いが，我慢している」(ULI'S，B 5：9)

It jonkje (＝Hy) is kâld. De triennen rinne him by de wangen del. Hy hat iiskâlde fuotsjes, mar hy jout net belies.「その男の子（＝彼）は寒いのだ。涙が頬を伝って落ちる。足はかじかんでいるが，我慢している」(ULI'S，B 11：11 変更)

☞ オランダ語やドイツ語との差に注意。

エ．He is cold.「彼は寒いのだ」

オ．Hij {heeft het koud/is koud}.「同上」

ド．{Ihm ist kalt/Es ist ihm kalt}.「同上」

西フリジア語ではオランダ語とちがって*Hy hat it kâld.「同上」とは言わない。

④ 慣用句

De boer en de boerinne hawwe *it* drok mei 't melken.「農夫とその妻は乳しぼりに忙しい」(it drok hawwe「忙しい」) (ULI'S，A 7：8 変更)

Binne jo *it* der mei iens?「あなたはその点にかんして賛成ですか」(it iens wêze「賛成である」) (ULI'S，B 13：12)

(b) 性質や評価を表わす非人称構文

ふつう非人称的には用いない動詞も，性質や評価を表わす文成分を伴って非人称構文を形成することがある。この場合，ふつう人を主語とする動詞でありながら，人を示す文成分を明示しない表現になる。これは本来の自動詞からの転用である。

It sit hjir noflik.「ここはすわり心地がいい」(← sitte「すわっている」) (Visser 1985：904)

It leit fêst lekker sa ûnder de tekkens, of net soms?「そうやって毛布にくるまっているのはさぞ気持ちがいいだろう，ちがうかね」(← lizze

「横たわっている」）（ULI'S，A 6：8）

Hjir *wennet it* goed.「ここは住みやすい」（←wenje「住む」）（Zantema 1984：1172）

☞ 次のような表現も可能である。
Hjir is *it* goed wenjen.「同上」(ib. 1172)

☞ オランダ語にも同様の表現がある。
オ．Hier woont *het* goed.「同上」
Hier is *het* goed wonen.「同上」
ドイツ語では非人称再帰構文を用いる。。
ド．Hier wohnt *es sich* gut.「同上」
*Hier ist *es* gut wohnen.「同上」
ドイツ語では lassen（オ．laten，フ．litte）を用いて次のように言うことができる。オランダ語や西フリジア語では不可。
ド．Hier *läßt es sich* gut wohnen.「同上」
オ．*Hier *laat het zich* goed wonen.「同上」
フ．*Hjir *lit it him* goed wenje.「同上」

☞ いわゆる中間態構文（エ．middle construction）に相当するものとして，次のような表現も可能である。オランダ語も同様。
フ．Jins eigen sliepkeamer sliept lekker.（← sliepe「眠る」）「自分の寝室は寝心地がいい」
オ．Je eigen slaapkamer slaapt lekker.（← slapen「同上」）「同上」

(6) har(ren) [hár(ən)]/har [har] と se [sə]

(a) まとめ

3人称代名詞目的格の基本形と弱形は複数形で har(ren) と se，単数女性形で har と se のように，たんなる発音上の異形ではなく，形態的にはっきり異なっている。複数形の基本形 harren と har に用法の区別はとくにない。ただし，単数女性形の基本形 har との混同を避ける場合には，複数形に harren を用いる。

両者には基本形と弱形の区別に応じてアクセントの有無の違いがある。

i）複数形 har(ren)/単数女性形 har：アクセントをもち得る（基本形）

ii）複数形・単数女性形 se：アクセントをもち得ない（弱形）

両者にはこのほかに次のような用法の違いがある。har(ren)/har は意味

的な制約が強いが，統語的な制約はゆるい。逆に，se は意味的な制約はゆるいが，統語的な制約が強い。

(b) 意味的な相違

i) 複数形 har(ren)/単数女性形 har：定（bepaald）の人を示す

ii) 複数形・単数女性形 se：定・不定（ûnbepaald）の人・物事を示す

Hy hat syn freonen skille en {*har(ren)/se*} útnoege foar it feest.「彼は友人たちに電話をして彼(女)らをパーティーに招待した」(定・人)（Hoekstra 194：49 変更）

Hy hat de tidskriften lêzen en {**har(ren)/se*} doe wer op it rim set.「彼は雑誌を読んでからそれを再び本棚に置いた」(定・物事)（ib. 49 変更）

Men hat {**har(ren)/se*} dy't altyd grine.「かならず文句を言う人はいるものだ」(不定・人)（ib. 53）

(c) 統語的な相違

アクセントをもたず，定の人を指す場合には，次のような統語的な用法の違いがある。

i) 複数形 har(ren)/単数女性形 har：さまざまな統語的機能を担う

ii) 複数形・単数女性形 se：典型的な他動詞の直接目的語と能動態の間接目的語にほぼ限られる

「典型的な他動詞の直接目的語」とは，心理動詞や再帰動詞などを含まず，目的語に直接，動作・作為の影響を及ぼす意味を表わす他動詞の目的語を指す。

se にたいする制約は単数女性形ではそれほどはっきりしておらず，話者によって差がある（Hoekstra 1994：59 f.)。以下の例は複数形の場合を示す。

① 典型的な直接目的語

Hy sloech {*har(ren)/se*}.「彼は彼(女)らをなぐった」

Ik seach {*har(ren)/se*} de poes slaan.「私は彼(女)らが子猫をなぐるのを見た」(Hoekstra 1994：50 変更)

Hy liet {*har(ren)/se*} de hûn slaan.「彼は彼(女)らにその犬をなぐらせた」(ib. 50 変更)

Ik achtsje {*har(ren)/se*} foar gjirrich.「私は彼(女)らはがめついと思う」

② 能動態の間接目的語

Ik joech {*har(ren)/se*} it boek net.「私は彼(女)らにその本をあげなかった」

Ik joech it {*har(ren)/se*} net.「私はそれを彼(女)らにあげなかった」

{It boek/It} waard {*har(ren)/*se*} net jûn.「{その本/それ} は彼(女)らに与えられた」

③ 前置詞の目的語

Sy seach wat bewegen efter {*har(ren)/*se*}「彼女は彼(女)らの背後で何かが動くのを見た」(付加成分) (Hoekstra 1994：51 変更)

前置詞句が動詞の補足成分としてはたらいているときには，容認度がやや高くなる。

Hy wachtet op {*har(ren)/?se*}.「彼は彼(女)らを待っている」(補足成分：op immen wachtsje「人を待つ」) (ib. 51 変更)

④ 形容詞の目的語

{*Har(ren)/*Se*} tige tagedien, die elk alles foar harren.「彼(女)らにとても好意をもっていたので，だれもが彼(女)らのために何でもした」(付加成分) (ib. 51 変更)

形容詞句が動詞の補足成分としてはたらいているときには，容認度がやや高くなる。

Elk is {*har(ren)/?se*} tige tagedien.「だれもが彼(女)らにとても好意をもっている」(補足成分) (ib. 51 変更)

⑤ 心理動詞の目的語

Myn hâlden en dragen fernuvere {*har(ren)/*se*}.「私の態度を見て彼(女)らは驚いた (＝私の態度が彼(女)らを驚かせた)」(ib. 52 変更)

⑥ 再帰動詞の目的語（§ 39 (3)(b)②）

Sy$_i$ fersinden {*har(ren)$_i$*/**se$_i$*} mei de namme.「彼(女)らは名前をまちがえた」(ULI'S, B 18：18 変更)

Sy$_i$ joegen {*har(ren)sels$_i$*/**sesels$_i$*} gjin kâns.「彼(女)らは自分たちにチャンスを与えなかった」(ULI'S, C 18：23 変更)

⑦ 「利害」などを表わす名詞句

動詞や形容詞の目的語以外の名詞句で利害などを表わす場合。ドイツ語の「自由な与格」(ド. freier Dativ) に対応する用法（§ 31 (5)）。

Ik ferve {*har(ren)*/**se*} it stek.「私は彼(女)らのために柵にペンキを塗ってやった」(Hoekstra 1994：52 変更)

Do praatst {*har(ren)*/**se*} te lûd.「君は声が高すぎてあの人たちの迷惑だ」(ib. 52 変更)

☞ 次の用例の se は「利害」の解釈では許されないが，後続する名詞とともに同一の文成分となって典型的な直接目的語を構成する「所有」の解釈では許される (Hoekstra 1994：56)。
Ik slachte [{*har(ren)*/**se*}] [dy hin].「私は彼(女)らのためにそのにわとりを屠殺した」(利害) (ib. 56 変更)
Ik slachte [{*har(ren)*/*se*} dy hin].「私は彼(女)らのにわとりを屠殺した」(所有) (ib. 56 変更)
次の用例の se は「利害」の解釈だけが可能なために許されない。
Ik slachte [{*har(ren)*/**se*}] [de buorlju dy hin].「私は彼(女)らのためにお隣のにわとりを屠殺した」(利害) (ib. 56 変更)

目的格の se は har(ren)/har とちがって主格の se（弱形）と語形的に区別がない。そのために，目的格の se は統語的に明らかに目的語と規定される場合に使用が限られ，形態的に目的格として明確な har(ren)/har はその他の場合にも用いることができると考えられる。前置詞の目的語（③）と形容詞の目的語（④）の場合に，補足成分では付加成分よりも容認度がやや高いのは，「動詞＋前置詞」，「動詞＋形容詞」という結びつきが一種の他動詞として再解釈（エ. reanalysis）される傾向があるためと考えられる。

☞ Hoekstra (1994) は生成文法の立場から「抽象格」(エ. abstract

Case）としてseは「構造格」（エ．structural Case）をもつのにたいして，har(ren)/harは「固有格」（エ．inherent Case）をもつと述べている。さらに，オランダ語の3人称代名詞複数形目的格zeとhunの用法の区別はアクセントの有無というたんなる音韻的な相違にすでに還元されてしまっているが（zeはアクセントをもたず，hunはアクセントをもつ場合に用いる），それが西フリジア語話者の若い世代にも広まりつつあることをオランダ語からの干渉の例として指摘している。

§38　人称代名詞の連接形，主語の省略，補文標識の「活用」

(1)　まとめ

人称代名詞には2人称親称単数主格と3人称単数男性・両性主格でそれぞれ前接的な連接形（de enklityske foarm）-o/-e（←-do/-de）とerがある。

人称代名詞の弱形は直前（前接的　enklitysk）または直後（後接的　proklitysk）に他の語があることを前提とすることから，同様に連接形とも言えるが（Visser 1988），基本形の発音上の異形であり，使用範囲も広い。一方，ここで言う連接形（以下ではたんに「連接形」とする）は統語的に用法が限定されており，定動詞または「補文導入要素」（補文標識dat/-t（←dat））を伴った従属接続詞，関係詞，間接疑問文の疑問詞）に付随してその直後だけにもっぱら前接的に用いられる。連接形はまた，3人称単数男性/両性主格でerであり，基本形hyとは形態的にはっきり異なっている((2))。2人称親称単数主格の連接形-o（←-do）はアクセントをもつことがある点で，連接形としては特殊である((3))。

☞ 弱形は「音韻的連接形」（it fonologyske klitik），-o/-eとerは「統語的連接形」（it syntaktyske klitik）と呼ぶことができる。

2人称親称単数主格の代名詞は連接形に限らず広く省略することができる((4))。また，従属文を導入する補文標識は主語が2人称親称単数主格の代名詞の場合，定動詞の場合と同様に，-stという人称語尾を伴って「活用」（de fleksje）する((5))。

☞ 語形的には，基本形hyは英語のheやオランダ語のhij，連接形erはドイツ語のerにそれぞれ対応する。歴史的に英語のheはドイツ語に見られるerの語末の-rが消失し（ド．mir ⇔ エ．me-Ø），語頭に指示的な要

素 h-が付加された語形である。西フリジア語に限らず，フリジア語群には広くこの 2 系列の語形が併存している。

☞ 西フリジア語の 3 人称代名詞には，単数男性／両性主格 hy と er のほかにも，女性単数と複数の主格 hja (hju) と se (§ 37 (4)(b))，複数目的格 har (-ren) と se (§ 37 (6))，単数女性目的格 har と se (§ 37 (6))，単数中性目的格 him と it (§ 39 (3)) のように，上記の h-をもつ語形が他の語形と並存している。h-をもつ語形は，前域や，文中でアクセントをもつ場合に用いる hy，アクセントをもつか，他の語に従属して用いる必要のない hja (hju) (§ 39 (3))，アクセントをもつか，典型的な他動詞以外の目的語の場合に用いる har (ren) と har，再帰的用法で用いる him のように，無標（エ. unmarked）の場合以外の用法も可能な語形であるといえる。このように，歴史的に指示的な要素 h-をもつ語形は，今日では有標（エ. marked）の場合の用法を担うようになっている。

(2) 3 人称単数男性/両性主格連接形 er [ər]

(a) er を用いる場合

er はアクセントをもたず，独立の 1 語としてつづるが，2 人称親称単数形 -o/-e (←-do/-de) と同様に直前の要素に続く連接形である。er は基本形 hy と違って前域（主文の定動詞の直前）で用いることができないばかりか，現われる位置は -o/-e (←-do/-de) と同様に，定動詞と「補文導入要素」(補文標識 dat/-t を伴った従属接続詞，関係詞，間接疑問文の疑問詞）の直後に限られる。

ただし，er が現われる位置であっても，アクセントを置いて強調したい場合には，かわりに hy を用いることができる。したがって，次の用例ではアクセントを置きたい場合に，er のかわりに hy を用いてさしつかえない。

Ik wit *dat er* juster siik wie.「私は彼が昨日，病気だったことを知っている」(従属接続詞の直後)

De moarns *waard er* trochwiet wekker. Ferheard *seach er* op 'e wekker.「その日の朝，彼はびっしょり汗をかいて目が覚めた。驚いて彼は目覚まし時計を見た」(定動詞の直後) (ULI'S, A 6：8)

Komt er moarn ek?「彼は明日も来るのか」(定動詞の直後)

Om't er út en troch graach in aike mei, hat er fiif hinnen.「ときどき

卵がほしくなるので，彼は雌鳥を5羽飼っている」（従属接続詞の直後）（ULI'S，B 11：14）

Ik kin it famke *dy't er* earjuster sjoen hat.「私は彼がおととい会った女の子を知っている」（関係詞の直後）

Poes sit yn 'e doar en betinkt *hoe't er* in mûs pakke sil.「猫がドアの内側にすわって，どうやってネズミをつかまえようか考えている」（間接疑問文の疑問詞の直後）（ULI'S，A 7：8）

(b) er を用いない場合

次の場合には er を用いることができない。

① 前域

{*Hy*/**Er*} komt moarn ek.「彼は明日も来る」

② 並列接続詞の直後

Mar {*hy*/**er*} komt moarn ek.「しかし，彼は明日も来る」

③ 並列接続詞としての dat の直後

接続詞 dat については注意が必要である。西フリジア語では接続詞 dat に続く文は，次の用例のような肯定文の場合，従属文の語順（定動詞は文末）でも主文の語順（定動詞は dat を除いて2番目）でもいい。つまり，dat は従属接続詞としても並列接続詞としてもはたらく。このとき，主文の語順をとる文が後続する並列接続詞としての dat の直後に er を置くことは許されない（De Haan 1983)。

i）並列接続詞としての dat（定動詞は2番目）

Ik tink dat {*hy*/**er*} komt moarn ek.「同上」

ii）従属接続詞としての dat（定動詞は文末）

Ik tink dat {*HY*/*er*} moarn ek komt.「私は彼が明日も来ると思う」（HY はアクセントをもつ）

④ 命令形の直後

命令形は定動詞ではないので，er はその直後には置けない。

Kom {*hy*/**er*} hjir mar!「そこの男の人，こっちへ来なさい」

☞ ただし，命令形としては hy を入れないのが一般的である。

Kom hjir mar！「こっちへ来なさい」

⑤ 文以外の比較の対象を示す as の直後

Ik bin riker as {*hy*/**er*}.「私は彼よりも金持ちだ」

比較の対象が文の場合には，その文が従属文になるので可能である。

Ik bin riker as {*hy* is/*er* oait wurde sil}.「私は {彼がそうであるよりも/彼がいつかそうなるよりも} 金持ちだ」

☞ 次の例の as は従属接続詞なので er が許されると予想されるが，じっさいは不自然な文になる。

？Ik bin riker as *er* is.「私は彼よりも金持ちだ」

この文では「だれより金持ちなのか」という情報を与える必要がある。しかし，er はアクセントをもたないので情報価値が少なく，不適当なために不自然な文になる。つまり，この例で er が許されないのは統語的な理由ではなく，言語の運用上の理由による。じじつ，次の例では tinkt「考える」が必要な情報を提供するのに十分なので，er を用いてさしつかえない。

Ik bin riker as *er* tinkt.「私は彼が考えているよりも金持ちだ」

(3) 2 人称親称単数主格連接形 -o [oːu]/-e [ə] (←-do/-de)

(a) -o/-e (←-do/-de) を用いる場合

連接形 -o/-e (←-do/-de) は人称語尾 -st ((5)) の後に付加されて -sto [stoːu]/-ste [stə] として現われる)。人称語尾 -st がなければ -o/-e (←-do/-de) は現われない。-o (←-do) はアクセントをもつことがあるが (-sto [..stoːu, ..stóːu])，-e (←-de) はアクセントをもたない (-ste [stə])。両者はそれぞれ -st-do/-st-de の連続が語中子音の無声化 (§ 19 (3)(a)①) と二重子音の縮約 (§ 16) を経た形である。人称語尾 -st は直前の歯茎音の縮約や脱落を起こすことがある (例. datsto [dɔt-stoːu] → [dɔstoːu])。現われる位置は er と同様に，定動詞と「補文導入要素」(補文標識 dat/-t を伴った従属接続詞，関係詞，間接疑問文の疑問詞) の直後に限られる。

er ((2)(a)) と異なって -o (←-do) はアクセントをもつことができるので，かわりに基本形 do (dû) を用いる必要はなく，じっさい -o/-e (←-do/-de) の現われる位置で基本形 do (dû) を用いることはできない。たとえば，次の

用例では -o/-e（←-do/-de）のかわりに do(dû) を用いることはできない。この点が er との重要な違いである。

Ik tink {*datsto* [dɔsto:u, dɔstó:u]/*datste* [dɔstə]/**datst do* [dɔzdo:u]} juster siik wiest.「私は君が昨日，病気だったと思う」(datsto [dɔsto:u]，datste [dɔstə]，datst do [dɔzdo:u] という発音になることについては§19(3)(a)参照。以下同様)

Witsto watsto dochst Jan?「ヨン，おまえは自分が何をしているかわかるかい」(witsto [vIsto:u] ←wit-st-o定動詞の直後；watsto [vɔsto:u] ← wat-st-o 間接疑問文の疑問詞の直後)（ULI'S，A 18：10)

Asto echt ôffalle wolst, dan *soesto* yn elk gefal de sûker stean litte moatte.「本当にダイエットしたいなら，とにかく君は砂糖を控えなければだめだ」(asto ← as-t-st-o 従属接続詞の直後；soesto ← soe-st-o 定動詞の直後)（ULI'S，C 3：7)

Sytske frege *ofsto* it wol oan koest, allinnich dit grutte hûs op oarder hâlde.「おまえがひとりでこの大きな家を守っていけるだろうかとシツケが聞いていたよ」(of(t)sto [ɔsto:u] ← of-t-st-o 従属接続詞の直後)(Bangma 1993²：67)

Dit is dy frou *dy'tste* juster sjoen hast.「これが君が昨日会った女性だ」(dy'tste [distə] ← dy-t-st-e 関係詞の直後)

(b) -o/-e（←-do/-de）を用いない場合

er ((2)(b)) と同様に，次の場合には -o/-e（←-de/-do）を用いることができない。

① 前域

{*Do*/**Sto*/**Ste*} komst moarn ek.「君は明日も来るんだ」

② 並列の接続詞の直後

{*Mar do*/**Marsto*/**Marste*} komst moarn ek.「しかし，君は明日も来るんだ」

③ 並列接続詞としての dat の直後

接続詞 dat について注意が必要であるのは er ((2)(b)) と同様である。

i）並列の接続詞（定動詞は2番目）

Ik tink {*dat do*/**datsto*/**datste*} komst moarn ek.「私は君が明日も来ると思う」

ii）従属の接続詞（定動詞は文末）

Ik tink {**dat do*/*datsto* [dɔsto:u]/*datste*} moarn ek komst.「私は君が明日も来ると思う」

④ 命令形の直後

命令形は定動詞ではないので，-o/-e はその直後には置けない。

{*Sis do* [sIzdo:u]/**Sisto* [sIsto:u]/**Siste* [sIstə]} it mar!「君，言ってくださいよ」(Bangma 1993[2]：7 変更)

☞ ただし，命令形としては do を入れないのが一般的である。
Sis it mar!「言ってくださいよ」

⑤ 文以外の比較の対象を示す as の直後

Ik bin riker {*as do* [ɔzdo:u]/**asto* [ɔsto:u]/**aste* [ɔstə]}.「私は君よりも金持ちだ」(De Haan 1994：80 変更)

比較の対象が文の場合：

Ik bin riker {**as do* [ɔzdo:u]/*asto* [ɔsto:u]/*aste* [ɔstə]} oait wurde silst}.「私は {君がそうであるよりも/君がいつかそうなるよりも} 金持ちだ」

☞ -e (←-de) はアクセントをもたないので，aste [ɔstə] を用いた次の用例の可否は(2)(b)⑤と同じ理由による。
？Ik bin riker *aste* bist.「私は君がそうであるよりも金持ちだ」
Ik bin riker *aste* tinkst.「私は君が考えているよりも金持ちだ」

☞ ik [ək]（基本形 ik [Ik]，弱形 'k [k] とは別）を連接形とみなす意見もある（De Haan 1994：86)。この意見によれば，次の例のように ik [ək] は連接形 er と同様に用いられる。
Miskien {moat *ik* [Ik]/moat *'k* [k]/moat *ik* [ək]/moat *er*} dy helpe.「もしかしたら {私は/彼は} 君に手助けしなければならないかもしれない」(ib. 86 変更)
{*Ik* [Ik] moat/*'k* [k] Moat/**Ik* [ək] moat/**Er* moat} dy miskien helpe.「{私は/彼は} もしかしたら君に手助けしなければならないかもしれない」(ib. 86 変更)

Ik tink {dat *ik* [Ik]/dat *'k* [k]/dat *ik* [ək]/dat *er*} dy helpe moat.「{私が/彼が} 君に手助けしなければならないかもしれないと私は思う」(ib. 86 変更)

(4) 主語の省略

(a) 主語を省略した文の種類

西フリジア語の主語を省略した文には一般に次の 2 種類がある。

① 前域（主文の定動詞の直前）以外で主語を欠くもの

② 前域で主語を欠くもの

①のタイプは 2 人称親称単数の代名詞に限られる（エ．pro-drop)。②のタイプは場面・文脈から話題になっていることが明らかであれば，主語に限らず，任意の文成分について起こる（エ．topic drop)。

① 前域以外で主語を欠くもの

2 人称親称単数主格の代名詞に限られる（エ．pro-drop)。

Miskien {*moatsto/moatste/moatst-*Ø} moarn ek komme.「もしかすると君は明日も来なければならないかもしれない」

Ik tink {*datsto/datste/datst-*Ø} moarn ek komme moatst.「もしかすると君は明日も来なければならないかもしれないと私は思う」

Miskien {*moat hy/moat er/*moat* Ø} moarn ek komme.「もしかすると彼は明日も来なければならないかもしれない」

Ik tink {*dat hy/dat er/*dat* Ø} moarn ek komme moat.「もしかすると彼は明日も来なければならないかもしれないと私は思う」

Miskien {*moatte jo/*moatte* Ø} moarn ek komme.「もしかするとあなたは明日も来なければならないかもしれない」

Ik tink {*dat jo/*dat* Ø} moarn ek komme moatte.「もしかするとあなたは明日も来なければならないかもしれないと私は思う」

Miskien {*moatte jim(me)/*moatte* Ø} moarn ek komme.「もしかすると君たちは明日も来なければならないかもしれない」

Ik tink {*dat jim(me)/*dat* Ø} moarn ek komme moatte.「もしかする

と君たちは明日も来なければならないかもしれないと私は思う」
他の人称代名詞の用例は割愛する。

② 前域で主語を欠くもの

場面・文脈から話題になっていることが明らかな任意の文成分（エ. topic drop）について可能である。

{*Do*/Ø} moatst moarn ek komme.「君は明日も来なければならない」
{*Hy*/Ø} moat moarn ek komme.「彼は明日も来なければならない」
（主語が hy「彼」であることが場面・文脈から明らかな場合）
{*Jo*/Ø} moatte moarn ek komme.「あなたは明日も来なければならない」（主語が jo「あなた」であることが場面・文脈から明らかな場合）
{*Jim(me)*/Ø} moatte moarn ek komme.「君たちは明日も来なければならない」（主語が jim(me)「君たち」であることが場面・文脈から明らかな場合）
他の人称代名詞の用例は割愛する。

次の会話のように，省略される話題は目的語のこともある。

A：Is der al ien yn by de dokter?
B：Ja, dy jonge fan Kuipers. Ø Rûn op krukken, hy hie wat oan it ankel.
A：Nee, ik leau de knibbel. Ø Hat er oprûn mei it fuotbaljen.”
A：「もうだれか診てもらっているのかしら」
B：「ああ，カイペルさんの坊やがね。松葉杖をついていたな。足首を痛めたらしいよ」（Ø＝dy jonge fan Kuipers「カイペルさんの坊や」，主語）
A：「いや，膝じゃないかと思うわ。サッカーでいためたのよ」（Ø＝de knibbel「膝」，目的語）（以上 Bangma 1993[2]：45 変更）

次の会話で省略されているのは dan「それなら」といった副詞であるとも考えられる。

Mem：Wannear woest deryn?
Heit：Sa gau mooglik, fan ’t simmer noch.

Mem：De bern geane aanst earst fjouwer wike op fakânsje.

Heit：Ø Kinne wy yn dy tiid moai ferhûzje. Ø Sitte wy der yn as se werom komme. Foar har in moaie ferrassing. Ø Noegje wy har nei de fakânsje ût op it nije adres. (...) Ø Kinne wy oantoane dat 'dy âlde lju' noch wat oandoarre.

母：「いつ移りたいっていうの」

父：「できるだけ早く，今年の夏にもだ」

母：「子供たちはもうすぐ4週間はバカンスに行ってしまうわ」

父：「(それなら) そのあいだに引っ越せばいいだろう。(それなら) あの子たちが戻ってきたときには，もうそこにいるわけだ。びっくりするぞ。(それなら) バカンスがすんだら，新しい住所に呼んでやることにしよう。(…) (それなら)『年寄り』もまだ何かやらかすんだってことを見せてやれるじゃないか」(以上 ib. 67)

前域は場面や文脈から明らかで省略しても誤解が生じない話題（トピック）が置かれやすい位置である。②のように，この位置で主語に限らず，任意の文成分の省略が可能なのは，このような言語の運用上の理由による。一方，①の省略は話題とは関係がない。この場合の主語の省略は統語的な現象であり，その理由は2人称親称単数に特有な語尾 -st によって形態的に主語がはっきり決まることに求められる。以下で扱う主語の省略は①の場合である。

(b) 2人称親称単数の代名詞を省略した文

上述のように，-sto/-ste は連接形 -o/-e (←-do/-de) を伴わずに -st だけで現われることができる。これは主語の人称代名詞を省略した文である。-st の可否は -sto/-ste の可否と同様である。

Ik bin riker {*as do* [ɔzdo:u]/**asto* [ɔsto:u]/**aste* [ɔstə]/**ast*-Ø}.「私は君よりも金持ちだ」

Ik tink {**dat do/datsto/datste/datst*-Ø} moarn ek komst.「私は君が明日も来ると思う」(従属接続詞としての dat，定動詞は文末)

Ik tink {*dat do/*datsto/*datste/*datst*-Ø} komst moarn ek.「私は君

が明日も来ると思う」(並列接続詞としての dat，定動詞は 2 番目)

{*Sis do* [sIzdo:u]/**Sisto* [sIsto:u]/**Siste* [sIstə]/**Sist*-Ø} it mar!「君，言ってくださいよ」

Ik bin riker {*as do* [ɔzdo:u]/**asto* [ɔsto:u]/**aste* [ɔstə]/**ast*-Ø}.「私は君よりも金持ちだ」

Ik bin riker {**as do/asto/aste/ast*-Ø} oait wurde silst.「私は君がいつかそうなるよりも金持ちだ」

Ik bin riker {**as do/asto/aste/ast*-Ø} tinkst.「私は君が考えているよりも金持ちだ」

☞ 次の用例の可否は(3)(b)⑤と同じ理由による。
?Ik bin riker *ast*-Ø bist.「私は君がそうであるより金持ちだ」
Ik bin riker *ast*-Ø tinkst.「私は君が考えているより金持ちだ」

(c) 連接形 -o/-e (←-do/-de) の省略と基本形 do (dû) の省略

西フリジア語では主語の 2 人称親称単数の人称代名詞の省略は，連接形でも基本形でもいい。つまり，文中でも主文の文頭でもかまわない。

① 文中：連接形 -o/-e (←-do/-de) の省略

-st の直後であればどんな場合でも省略が可能である。次の例で省略されているのは連接形である。

Hoe *bedoelst*-Ø？「どういうつもりなの」(Bangma 1993²：30)

Och, Gabe, jonge, do witst net *watst'*-Ø seist.「おや，ガーベ，おまえは自分が何を言っているかわかっていないな」(ULI'S，A 19：7)

Ast-Ø no earder thûs komst fan 'e middei, dan ha wy noch in goed oere om wat te keapjen.「君が今日の午後，もっと早く帰宅すれば，私たちは買い物をするのにまだたっぷり 1 時間も時間がある」(Bangma 1993²：25)

Drinte is ek sa'n provinsje *dêrst*-Ø prachtich fytse kinst.「ドレンテ(オ．Drenthe) はすばらしくサイクリングができる州でもある」(dêr-(t)ste [dɛ(:)stə] ← dêr-t-st-e) (ib. 1993²：175)

② 主文の文頭：基本形 do（dû）の省略

次の例で省略されているのは基本形である（§ 37 (3)(d)）。

Ja, ja, Ø hast gelyk.「そうそう，君の言うとおりだ」(ULI'S, A 16：8 変更)

Ø Kinst hjir fan alles wol krije.「ここでは君は何でももらえる」(Bangma 1993²：7 変更)

Ja, Ø komst troch streken dêrst mei de auto noait komst.「そうさ，君は車では絶対行けないようなところを回るんだから」(ib. 175)

☞ 歴史的には定動詞の 2 人称親称単数の語尾 -st は，ドイツ語の -st などと同様に，本来の人称語尾 -s に 2 人称単数代名詞主格形の do が連接して，後代に発達したものである（定動詞 -s　do → 定動詞 -s-do → 定動詞 -s-{to/-te} → 定動詞-s-t)。したがって，歴史的には西フリジア語で 'Ø Komst.'「君は来る」と言えば，すでにそれだけで 2 人称親称単数代名詞をつけていることになり，'Do komst.'「同上」は本来，余剰的である。西フリジア語で 'Ø Komst.'「同上」のような主語を欠く文が許されるのは，-st という語尾が形態的にはっきりと 2 人称親称単数の標識としてはたらくようになったことと並んで，このような歴史的な理由による。

(5) 人称語尾 -st と補文標識の「活用」

-sto/-ste は補文標識の人称語尾 -st と 2 人称親称代名詞単数主格連接形 -o/-e の連続である。

-st は主語が 2 人称親称単数の場合，定動詞と補文導入要素（補文標識 dat/-t を伴った従属接続詞，関係詞，間接疑問文の疑問詞）の直後で現われる。-st はこの場合になくてはならず，これ以外の場合にあってはならない。

一方，連接形 -o/-e（←-do/-de）が現われるのは -st の直後に限られるが，現われるかどうかは自由である。連接形が現われなくてもいいのは，(4)(a)で述べたように，-st によって主語が 2 人称親称単数の代名詞であることが明らかであることと関係がある。

定動詞の位置は補文標識の有無に依存している。補文標識がない平叙文の主文では，定動詞は 2 番目の文成分の位置に現われることができるが，補文標識がある従属文では，その位置が補文標識によってふさがっているので，

定動詞は文末にとどまっていなければならない。補文標識の位置と平叙文の主文の定動詞の位置は同じ位置であり，両者のどれかひとつだけに占められている必要がある。

定動詞（do kom-st「君は来る」）と補文標識の -st は同じ機能をもち，しかも本来的に文中の同じ位置に現われている。つまり，定動詞の -st と補文標識の -st は同一であり，ともに 2 人称親称単数の変化語尾であるといえる。このように，西フリジア語では定動詞と同様に補文標識も主語と「一致」し，主語が 2 人称親称単数の場合にかぎって「活用」する（Visser 1988 a, Hoekstra/Marácz 1989 a, 1989 b, De Haan 1994）。

☞ -sto/-ste を‘{ 補文標識/定動詞} の人称語尾（-st）＋ 2 人称親称単数代名詞（-o/-e)’とみなす上述の立場にたいして，-sto/-ste 全体を 2 人称親称単数代名詞の連接形とみなそうという意見がある（Tiersma 1985：62, Van der Meer 1991 a)。しかし，この考え方では次の事実の説明に矛盾が生じる。

i ）抜き取り

Hy$_i$ tink ik [{*dat* **er*$_i$/*dat* Ø$_i$} moarn komme sil].「彼は，私は明日来ると思う」(De Haan 1994：83 変更)

Do$_i$ tink ik [{*datst*/**dat* Ø$_i$} moarn komme silst].「君は，私は明日来ると思う」(ib. 83 変更)

ii ）等位接続での省略

Ik wit net {*hoe't er*/*hoe't*-Ø} en wannear't er hjir komt.「彼がどのように，そしていつここに来るか私は知らない」(ib. 83 変更)

Ik wit net {*hoe'tst*/**hoe't*-Ø} en wannear'tst hjir komst.「君がどのように，そしていつここに来るか私は知らない」(ib. 83 変更)

-st を代名詞連接形（の一部）とみなすと，同じく代名詞連接形である er の有無と文法性の判定が異なることが説明できない。しかし，これを人称語尾とみなせば，i ）では -sto の代名詞の部分である -o（← do）だけが取り出され，人称語尾 -st が取り出せない理由が説明できる。同様に，ii ）では人称語尾 -st が省略できない理由が説明できる。したがって，-sto/-ste 全体を 2 人称親称単数代名詞の連接形とみなそうとする意見は誤りである（De Haan 1994：82 f.)。

☞ 補文標識が活用するという考えかたは古く，すでに Van Haeringen (1939) や Van Ginneken (1939) に見られる。同様の現象は 2 人称親称単数に限らず，オランダ語やドイツ語の方言にも広く存在する。

(6) dy'tst [dist]

関係代名詞単数主格 dy't [dit] に人称語尾 -st がついた dy'tst [dist] は，連接形の用法について例外的な現象を示す（Hoekema 1989：143)。

① dy'tst には連接形 -o/-e（←-do/-de）がつかないこと

Do, {*dyt'st*/**dy'tsto*/**dy'tste*} gjin siler bist, hoechst grif gjin boat.「ヨット遊びをやらない君にボートは必要ないだろう」(ib. 143 変更)

② 先行詞は主格基本形 do に限られること

先行詞が連接形 -o/-e（←-do/-de）や目的格の場合には，人称語尾 -st のない dy't を用いる。

Moasto, {*dy't*/**dy'tst*} gjin siler bist, in boat hawwe?「ヨット遊びをやらない君にボートが必要なのか」(ib. 144 変更)

Foar dy, {*dy't*/**dy'tst*} gjin siler bist, is in boat oerstallich.「ヨット遊びをやらない君にボートはよけいだ」(ib. 144 変更)

ただし，この構文の文法性については判定が揺れている。とくに関係代名詞に dy't が選ばれた場合には，上の例文で定動詞が 2 人称親称単数形 bist ではなく，3 人称単数形 is になるという判定もある。

Moasto, *dy't* gjin siler *is*, in boat hawwe?「ヨット遊びをやらない君にボートが必要なのか」

Foar dy, *dy't* gjin siler *is*, is in boat oerstallich.「ヨット遊びをやらない君にボートはよけいだ」

☞ ドイツ語の標準語では関係文中の du の有無と定動詞の人称語尾との関係が規範的に決まっている。

ド. du, {*der du* kein Segler *bist*/*der* kein Segler *ist*}「ヨット遊びをやらない君」

§ 39 人称代名詞の再帰的用法

(1) 再帰代名詞（it weromwurkjend foarnamwurd）の欠如

代名詞にはその代名詞が含まれる文や他の文の中のさまざまな名詞句を受ける用法がある。そのなかでとくに代名詞が含まれる単文（あるいは単文に準じる最小単位）の主語名詞句を受ける用法を「再帰的用法」(it werom-

wurkjend gebrûk）という。この用法には単文の主語である名詞句をそれ以外の名詞句から区別する役目があるので，とくに3人称で重要である（話者や相手は主語か否かにかかわらず決まっているので，区別する必要がない。この点で英語は特異である。）。ドイツ語（sich）やオランダ語（zich）には3人称代名詞（および3人称から転じた2人称代名詞）の目的格に特別な再帰代名詞があり，北ゲルマン語にはさらに所有代名詞の再帰形 sin，sín「自分の」がある。しかし，西フリジア語には北海ゲルマン語の特徴のなごりとして再帰代名詞がなく，再帰的用法にも人称代名詞を用いる。

したがって，次の文は him，syn が主語の Pyt を指す場合と，主語以外の人を指す場合とがある。

Pyt wasket *him*.

i）「ピトは自分の体を洗う」(him＝Pyt)

ii）「ピトは（ピト以外の）男の人の体を洗う」(him≠Pyt)

Pyt tute *syn* frou.

i）「ピトは自分の妻にキスした」(syn＝Pyt)

ii）「ピトは（ピト以外の）男の人の妻にキスした」(syn≠Pyt)

☞ 再帰代名詞がないのは北フリジア語でも同様である。たとえばフェリング方言（北フ．fering）では次のように言う（Braren/Wilts/Sjölin 1988[2]：39）。

Hi twait *ham*.

i）「彼は自分の体を洗う」(ham＝hi)

ii）「彼は（彼以外の）男の人の体を洗う」(ham≠hi)

ただし，東フリジア語（東フ．seeltersk）は低地ドイツ語から再帰代名詞 sik を借用した（Fort 1980：197）。

Hie$_i$ waaskt *sik*$_i$.「彼は自分の体を洗う」(sik＝hie)

Hie$_i$ waaskt *him*$_j$.「彼は（彼以外の）男の人の体を洗う」(him≠hie)

オランダ語の再帰代名詞 zich は高地ドイツ語からの借用である（De Vries 1987：863）。

Hij$_i$ wast *zich*$_i$.「彼は自分の体を洗う」(zich＝hij)

Hij$_i$ wast *hem*$_j$.「彼は（彼以外の）男の人の体を洗う」(hem≠hij)

(2) 再帰表現について

(a) 再帰動詞と他動詞の再帰的用法

‘動詞＋人称代名詞目的格’ による再帰表現には，もっぱら再帰的に用いる「再帰動詞」(例．jin fersinne「まちがえる」) と，他動詞を再帰的に用いる「他動詞の再帰的用法」(例．immen　waskje「だれかの体を洗う」→ jin waskje「自分の体を洗う」) とがある。一般に辞書などでは便宜的に再帰表現を不定代名詞 jin，jins (men「(話者を含めて一般的に) 人は」の目的格と所有格)，非再帰表現を不定代名詞 immen，syn で示している。

☞ jin，jins が men の再帰代名詞であるという意味ではない (§ 42 (2)(b))。

① 再帰動詞

Hy$_1$ fersinde {*him*$_1$/**my*} mei de wei.「彼は道をまちがえた」(「…私にまちがえさせた」という意味にはならない)

② 他動詞の再帰的用法

Hy$_1$ hat {*him*$_1$/*my*} skeard.「彼は {自分の/私の} ひげをそった」

(b) 他動詞や自動詞から転用した再帰構文

① 他動詞からの転用：状態や結果を示す文成分を伴うもの

本来，他動詞でありながら，用法によってはもっぱら再帰的に用いるものがある。たとえば，他動詞 fiele「感じる」は再帰的に用いた人称代名詞目的格と状態を示す文成分を伴って小節 (エ．small clause) をなすと，もっぱら再帰的に「自分を…と感じる」という意味で用いる。

Hy$_1$ fielde {*him*$_1$/**my*} *slop en siik*.「彼は (自分が) ぐったりして病気のように感じた」(「彼は私がぐったりして病気であるように感じた」という意味にはならない) (ULI'S, A 6：8 変更)

同様に，jin sêd ite「満腹になるまで食べる」(← ite「食べる」) は再帰的に用いた人称代名詞目的格と結果を示す文成分を伴って小節をなしている。これは「自分を満腹になるまで食べる」という意味ではない。

De rikelju$_1$ koene *harren*$_1$ *sêd ite* oan it oerfloed fan spizen.「金持ちはあり余るほどの食べ物を腹一杯食べることができた」(ULI'S，B 3：11)

② 他動詞からの転用：非分離の前綴りを伴って再帰動詞を形成するもの

状態や結果を示す文成分を伴うかわりに，非分離の前綴りを伴って新たに再帰動詞を形成するものがある。

Wy$_1$ hawwe *ûs*$_1$ *oeriten*.「私たちは食べすぎた」(jin oerite「食べすぎる」← ite「食べる」)

この動詞は再帰構文以外に用いることができない。

Wy$_1$ *oerite ûs*$_1$ oan allerhande ûnnut iten.「私たちはやたらにいらないものを食べて食べすぎになる」(同上) (ULI'S, C 3：9 変更)

⇔ *Wy oerite* {*oan allerhande ûnnut iten/**ûs* allerhande ûnnut iten/*allerhande ûnnut iten}.「同上」

☞ オランダ語も同様。

Wij overeten ons aan allerhande onnodig eten.「同上」

⇔ *Wij overeten* {*aan allerhande onnodig eten/**ons* allerhande onnodig eten/*allerhande onnodig eten}.「同上」

☞ ただし，jin oerite「食べすぎる」については，比喩的な表現として in kwaal oerite「滋養に富むものを食べて病を克服する」(Zantema 1984：683) という他動詞的な表現がある。

③ 自動詞からの転用：結果を表わす文成分を伴うもの

本来，目的語をとらないいわゆる自動詞でありながら，再帰的に用いた人称代名詞目的格と結果を示す文成分を伴って小節をなす再帰構文を形成するものがある。

Hja$_1$ arbeiden *har(ren)*$_1$ *stikken*.「彼らは働きすぎてくたくたになった」(jin stikken arbeidzje「くたくたになるまで働く」← arbeidzje「働く」)

Hja$_1$ switte *har*$_1$ *oan wetter*.「彼女は汗びっしょりになった」(jin oan wetter switte「汗びっしょりになる」← switte「汗をかく」)

④ その他

再帰動詞，他動詞，自動詞のいずれにも用い，意味的な対応がはっきりせず，転用の関係がわかりにくいものがある。

Ik haw *my dearûn* om de trein noch te heljen.「列車に何とか間に合う

ように私は必死で走った」(再帰動詞 jin dearinne) (Zantema 1984：160)

Dy jonge *rint de âldman dea.*「あの男の子はじいさんを引きずり回している」(他動詞 immen dearinne「…を引きずり回す」) (ib. 160)

De feart *rint* yn 't doarp *dea.*「その運河は村の中で行き止まりになっている」(自動詞 dearinne「行き止まりである」) (ib. 160)

(3) 再帰的用法と非再帰的用法の人称代名詞

(a) 語形の種類

§36(2)の表に掲げた3人称代名詞の目的格はすべて再帰的に用いられるわけではなく，再帰的用法と非再帰的用法とで語形的に完全には一致しない。

		非再帰的用法	再帰的用法
単数	男性	him	him
	女性	har, se	har
	中性	it, 't	him (物事，男の人)，har (女の人)
複数		har(ren)，se	har(ren)

☞ 北フリジア語では中性単数形が再帰的用法と非再帰的用法とで語形的に一致しない。モーリング方言 (北フ. mooring) の用例を示す。

Dåt$_i$ draait {*ham*$_i$/**et*$_i$/**dåt*$_i$}.「それは回っている」(et は dåt の弱形；ド. Das dreht sich.) (清水 1992：100 変更)

Dåt$_i$ ferstoont {*ham*$_i$/**et*$_i$/**dåt*$_i$}.「それは自明だ」(ド. Das versteht sich.) (ib. 100 変更)

Jü twoit *dåt bjarn*$_j$ en tjucht *et*$_j$ önj.「彼女はその子供の体を洗って，着物を着せる」(ド. Sie wäscht das Kind en zieht es an.) (Walker/Sjölin 1986：L 7.1)

⇔ *Dåt bjarn*$_i$ touf *ham*$_i$ uler.「その子供はけっして自分の体を洗わなかった」(ド. Das Kind wusch sich nie.) (ib. L 7.4)

(b) 個々の用例

① it のかわりの him，har

i) 物事を表わす場合

物事を示す中性名詞，中性代名詞および従属文のように it で受けるものには，再帰的用法で him を用いる。it は用いない。

It waar$_i$ hold {*him*$_i$/**it*$_i$} goed.「天気はもちこたえた」(← jin hâlde「もちこたえる」) (Visser 1985: 63 変更)

その他の用例。

Yn earder tiden hat it Frysk yn in folle grutter gebiet as no de taal west der't *it folk*$_i$ *him*$_i$ yn utere.「以前はフリジア語が今よりずっと広い地域で人々が自らを表現する言語だった」(Stienstra 1982：31)

It$_i$ lit *him*$_i$ tinke.「それはもっともだ」

[*Dat dat net sûnder gefolgen bliuwt*]$_i$ lit *him*$_i$ tinke!「それが後をひかずには終わらない（＝結果なしではとどまらない）ことは明らかだ」(ULI'S，B 9：7)

sels ((4)) を用いた場合も同様である。*itsels は不可。

In wurd$_i$ kin op *himsels*$_i$ Frysk wêze en neffens de foarm ek Frysk bliuwe, mar doch ferhollânskje.「語がそれ自身としてはフリジア語であり，語形からもフリジア語であり続けながら，オランダ語化してしまうことがある」(Breuker 1992^2：16)

It$_i$ seit *himsels*$_i$ dat yn elts doarp troch al dy jierren hinne in hechte mienskip ûntstien is.「どの村にもそうした長年のあいだに緊密な共同体ができあがったのは当然のことである」(ULI'S，C 11：2 変更)

ii) 人を表わす場合

人を示す中性名詞（例：it bern「子供」，it jonkje「男の子」，it famke「女の子」）の場合には，自然性を優先させるという理由から it ではなく，him，har を用いる。

It bern$_i$ ferfeelt {*him*$_i$/*har*$_i$}.「その子供は退屈している」(← jin ferfele「退屈する」，him と har の使い分けは子供の性別による)

It famke$_i$ skammet *har*$_i$ foar har stikkene jas.「その女の子は自分のいたんだコートのことを恥ずかしく思っている」(← jin skamje「恥じる」) (ULI'S, B 18：21 変更)

② se のかわりの har(ren)/har

再帰的用法には 3 人称複数形で har(ren), 3 人称単数女性形で har を用いる。se は用いない (§ 37 (6)(c)⑥)。

Hja$_i$ fersinden {*har(ren)*$_i$/**se*$_i$} mei dat telefoannûmmer.「彼ら (彼女ら) は電話番号をまちがえた」(Bosma-Banning 1981[2]：69 変更)

Hja$_i$ ferried {*har*$_i$/**se*$_i$}.「彼女は運転していて道に迷った」(← jin ferride「運転していて道に迷う」)

sels ((4)) を用いた表現も同様である。*sesels は不可。

De minsken harken net nei wat God fertelde. *Se*$_i$ tochten allinne oan {*harsels*$_i$/*harren sels*$_i$/**sesels*$_i$}.「人間たちは神様の言ったことに耳を傾けようとしなかった。彼らは自分たちのことばかり考えた」(De Arke fan Noach 変更)

③ men [mən]「(話者を含んで一般的に) 人は」には jin を用いる (§ 42 (2)(b))。

It is better *jin* te *fersinnen* as *jin* te *fertaasten*.「へまをする (jin fersinne) のはまちがって人の金に手を出す (jin fertaaste) よりましだ」(Beintema 1990: 38)

☞ jin, jins が men の再帰代名詞であるという意味ではない (§ 42 (2)(b))。

(4) sels

(a) sels の意味

sels [sɛls] を名詞句や代名詞の後に置くと,「(その名詞句や代名詞) 自身」という意味になる。sels はまた, 名詞句や代名詞とは分離した位置に現われて,「(その名詞句や代名詞) 自身」という意味になることがある。

ただし, sels は英語の -self/-selves と違って, 目的語の代名詞の直後だけではなく, 主語の名詞句や代名詞を指すものとしても用いる。したがって,

もっぱら再帰的用法を明示するとは限らず，主語自身による行為を強調することにもなる ((b))。

☞ sels は英語の -self/-selves よりもオランダ語の zelf やドイツ語の selbst に似ている。(-)selde(n) (§ 41 (2)(c)) 参照。

Pyt wasket *sels*.「ピトは自分で洗濯をする」

Pyt wasket Jan *sels*.「ピトは｛自分でヨンの体を洗う/ヨン自身の体を洗う｝」

したがって，次の文はやはりあいまいである。

Pyt wasket him *sels*.

i）「ピトは自分で（ピト以外の）男の人の体を洗う」(him≠Pyt)

him と sels のあいだに休止をはさみ，him に強調のアクセントを置く： [hÍm sɛ́ls]

ii）「ピトは自分で自分の体を洗う」(him＝Pyt)

him と sels のあいだに休止をはさまず，him に強調のアクセントを置かずに発音する： [hImsɛ́ls]

正書法で次のように him と sels をまとめて 1 語で書くと，ii）の再帰的意味であることがはっきり示される。

Pyt wasket *himsels*.「ピトは自分の体を洗う」(him＝Pyt)

(b) 主語を指す sels の用法

sels は主語の直後に付加したり，主語とは離れた位置で用いて「(主語が) 自分で」という意味になることがある。

Yn in boek wurdt ferteld oer saken dy't *josels* soms meimakke hawwe.「書物の中にはときにはあなた自身が体験した事柄が語られていることがある」(ULI'S, A 16：7)

Dy kinne *je sels* net neisjen.「それはあなた自身では確かめられない」(ULI'S, A 16：8)

Do bist *sels* ferkeard!「君は自分がまちがってるんだ」(ULI'S, C 3：8)

Sels wurke *se* foar heale dagen.「彼女ら自身，半日働いていた」(ULI'S,

A 6：8)

Fan *dy taal sels* is lykwols neat bewarre bleaun.「その言語自体については何も残されていない」(Boersma/Van der Woude 1981²：7)

☞ 英語では I...myself，he...himself などと言い，*Iself，*heself などとは言わないことに注意。

(c) sels を使っても使わなくてもいい場合

他動詞の再帰用法では sels の使用は任意であることが多く，対比や強調の意味で sels を使う場合が多い。

Wy$_i$ skeare {*ûs*$_i$/*ûssels*$_i$}.「私たちは自分のひげをそる」

Se$_i$ har {*har(ren)*$_i$/*harsels*$_i$} al hielendal oan it nije libben oanpast.「彼らはもうすっかり新しい生活に慣れた」(ULI'S，B 20：8 変更)

Ik kin {*my*/*mysels*} moai bedrippe.「私はけっこう暮らしていける」(← jin (sels) bedrippe kinne「生計を立てる」) (ULI'S，B 11：13 変更)

(d) sels を使えない場合

再帰的用法でしか使えない本来の再帰動詞では，目的語の 3 人称代名詞を他の代名詞から区別する必要がないので，sels を付加する意味がなく，じっさいに付加できない。

Hy$_i$ skammet {him$_i$/*himsels$_i$}.「彼は恥ずかしく思っている」(← jin skammje「恥じる」)

Hy$_i$ fersint {*him*$_i$/**himsels*$_i$} hieltyd.「彼は勘違いしてばかりいる」(← jin fersinne「まちがえる」) (ULI'S，C 20：12 変更)

Wy$_i$ oerite {*ûs*$_i$/**ûssels*$_i$} oan allerhande ûnnut iten.「私たちはやたらにいらないものを食べて食べすぎになる」(← jin oerite「食べすぎる」) (ULI'S，C 3：9)

☞ オランダ語も同様。ただし，再帰代名詞として zich を用いる。
Hij schaamt {zich/*zichzelf}.「同上」(← zich schamen「恥じる」)
Hij vergist {zich/*zichzelf}.「同上」(← zich vergissen「まちがえる」)
Wij overeten {ons/*onszelf} ann allerhande onnodig eten.「同上」(← zich overeten「食べすぎる」)

(e) sels を使わなければならない場合

特別に「自分自身」という意味を強調する場合には，sels を付加しなければならないことがある。とくに前置詞の目的語である場合に多い。

foar jinsels wêze「利己的である」 foar jinsels stean「自活する」
ta jinsels komme「正気に返る」 fan jinsels falle「気を失う」
op jinsels wêze「独り立ちしている」
jinsels {bliuwe/wêze}「動じない」

Nosto aanst op {**dy*/*dysels*} silst, moatte wy der dochs eefkes oer gear.「あなたはもうじきひとりでやっていくのだから，私たちもそろそろ何か準備しておかなければいけないわね」(Bangma 1993[2]：83 変更)

[Dy't by elk in bêsten is]$_1$, is in minnen foar {**him*$_1$/*himsels*$_1$}.「だれにとっても良い人は自分にとっては悪い人だ（ことわざ）」(Beintema 1990：17 変更)

Elk$_1$ is {**him*$_1$/*himsels*$_1$} de neiste.「だれでも自分がいちばんかわいい（＝もっとも近い。ことわざ）」(ib. 33 変更)

Se$_1$ hatet {**har*$_1$/*harsels*$_1$}.「彼女は自己嫌悪に陥っている」

Hy$_1$ ken {**him*$_1$/*himsels*$_1$} hielendal net.「彼は自分のことが全然わかっていない」

☞ オランダ語も同様。ただし，再帰代名詞として zich を用いる。
オ．Zij haat {*zich/zichzelf}.「同上」
Hij kent {*zich/zichzelf}.「同上」
フ．ta {*jin/jinsels} komme「正気に返る」
オ．tot {*zich/zichzelf} komen「同上」

(f) sels「…さえ」

sels をある文成分の直前に置くと，「…でさえ」という意味になる。この場合の sels は「自身」という意味の場合よりもアクセントが弱い。

Sels de heechste bergen rekken ûnder it wetter.「一番高い山でさえ水の下に沈んでしまった」(De Arke fan Noach)

Op it stuit is it *sels sa*, dat wy net mear dea gean fan de honger, mar fan tefolle iten.「こんにち，私たちは飢えでではなく，食べ過ぎで死ぬようにさえなっている」(ULI'S, B 3：12)

(5) 相互代名詞 (it wjersidich foarnamwurd)

人称代名詞は sels を伴っても「たがいに」という相互の意味を表わすことはない。相互の意味には相互代名詞 inoar [ənwár], elkoar [əlkwár, əlkóər]; malkoar [mɔlkóər, mɔlkwár] (文語的), mekoar [məkwár, məkóər] (口語的) を用いる。inoarren [ənwárən], elkoarren [əlkwárən], mekoarren [məkwárən] という語形もある。前置詞とともに1語でつづることもある。西フリジア語の相互代名詞はオランダ語，ドイツ語，英語と同様に主語として用いることはできない。

i) 再帰

Wy waskje {*ûs/ûssels*}.「私たちは自分の体を洗う」

ii) 相互

Wy waskje {*inoar/elkoar/mekoar*}.「私たちはたがいに体を洗う」

☞ ドイツ語では再帰代名詞 sich を相互の意味でも用いることに注意。

オ. Wij wassen {*ons* (再帰)/*elkaar* (相互)/*mekaar* (相互)}.

エ. We wash {*ourselves* (再帰)/*each other* (相互)/*one another* (相互)}.

ス. Vi tvättar {oss (再帰)/varandra (相互)}. (他の北ゲルマン語も同様)

⇔ド. Wir waschen {*uns* (再帰・相互)/*einander* (相互)}.

☞ 語形的に inoar (← in+oar) はドイツ語の einander や英語の one another (正確には one+other) に対応し，elkoar (← elk+oar) は英語の each other に対応する (スウェーデン語の varandra (← var+andra) なども同様)。malkoar/mekoar はオランダ語の malkaar/mekaar が 'manlijc (=オ. ieder, ド. jeder) anderen' に由来するのと同様である (De Vries 1987：156)。

その他の用例。

In fearnsieu lyn binne se oan *elkoar* fersein.「四半世紀前に二人は婚約

した」(ULI'S, B 1：8)

De bewenners wiene alhiel op *mekoar* oanwiisd.「住民はたがいに完全に頼りあっていた」(ULI'S, C 11：2 変更)

Sport makket dat de minsken har bruorren en susters *faninoar* fiele.「スポーツは人々に自分たちがたがいに兄弟や姉妹であるように感じさせてくれる」(Bangma 1993²: 155)

Stêd en doarp komme op dizze wize hieltyd tichter *byinoar* te stean.「都市と村はこうしてたがいにますます近づきつつある」(ULI'S, C 11：3)

§ 40 所有代名詞 (it besitlik foarnamwurd)

(1) 限定形と独立形

所有代名詞には名詞を修飾する「限定形」(「…の」) と単独で叙述的に用いる「独立形」(「…のもの」) があり，両者とも無変化である。独立形にいくつか語形がある場合，用法にはとくに違いがない。所有代名詞の独立形は形容詞の叙述用法とちがって，主語や目的語として名詞句のかわりになる。

	限定形	独立形
〈単数〉		
1人称	myn [min]	mines [mínəs]
		minen(t) [mínən(t)]
2人称親称	dyn [din]	dines [dínəs]
		dinen(t) [dínən(t)]
2人称敬称	jo [jo:u]	jowes [jó:wəs]
	je [jə] (弱形)	
	(文語 jins	(文語 jin(ne)s
	[jəⁿs, jIⁿs])	[jənəs, jÍnəs, jəⁿs, jIⁿs])
3人称男性/両性	syn [sin]	sines [sínəs]
		sinen(t) [sínən(t)]

女性	har [har]	harres [hárəs]
中性	syn [sin]	sines [sínəs]
		sinen(t) [sínən(t)]
〈複数〉		
1人称	ús [ys]	uzes [ýzəs]
2人称	jim(me) [jÍm(ə)]	jimmes [jÍməs]
3人称	har(ren) [hár(ən)]	harres [hárəs]

☞ jins, jinnes の発音表記は，WFT 10 (1993：67) には jins [jIⁿṣ, jönˢs], ´jinnes [jInəs, jönəs] とあるのにたいして，Zantema (1984：460) には jins [jəⁿs], ´jinnes [jənəs] とあり，一定しない (§ 42 (2))。

☞ Hoekema (1992：20)は限定形 jins の独立形として jins と jowes を挙げており，jinnes は挙げていない。一方，Van der Woude (1981：49)は限定形 jins には語形的に対応する独立形がなく，jowes を用いると述べている。

(2) 個々の用法

(a) ús の発音

ús [ys]「私たちの」は有声音が後続すると [yz] と発音する。それ以外は [ys] と発音する。独立形は z を用いて uzes [ýzəs] とつづる（語末音の無声化，§ 14)。

ús auto [yz ɔ́uto:]「私たちの車」

Us Wurk [yz vøɹk]「ユズ・ヴルク（フローニンゲン大学フリジア語学科発行のフリジア語学文学の学術雑誌)」

Us auto sjocht der krekt sa út as jimmes.「私たちの車はあなたがたのと同じように見える」(ULI'S, A 18：13 変更)

Dêr stiet jim fyts en dêr stiet *uzes* ek.「そこに君たちの自転車があるし，私たちのもそこにある」(ULI'S, A 18：13)

☞ オランダ語の ons [ɔns]「私たちの」と onze [ɔ́nzə]「同左（変化形)」，ドイツ語の uns [Uns]「私たち（対格・与格)」と unser [Únzəɹ]「私たちの」の発音を参照。

(b) その他の用例

Dat is *har* brommer en net *sines*.「それは彼女のオートバイであり，彼のものではありません」(ULI'S, A 18：13)

Dat is *syn* fyts en dat is *harres*.「それが彼の自転車で，あれが彼女のです」(ib.)

Dizze hoed is heit *sinen (t)*.「その帽子は父のものです」(ULI'S, B 18：13)

(c) jo, (jins)「あなたの」; jowes「あなたのもの」

2人称敬称は大文字 (Jo, Jowes) で書くことがある。限定形には jins (あるいは大文字で Jins) もあるが，聖書などで見られる古風な言いかたであり，今日ではふつう用いない。jins (Jins) は今日では消失した jy (Jy) の属格である。1933年の聖書訳 (G.A. Wumkes 訳) では Jins を用いているが，1978年 (1989²) の新訳では Jo に変わっている (§ 37 (3)(a)②)。

Us Heit, dy't yn de himelen binne, *Jins* namme wirde hillige; *Jins* keninkryk komme; *Jins* wollen barre allyk yn 'e himel, sa ek op ierde; (...) hwent *Jowes* is it keninkryk en de krêft en de hearlikheit oant yn ivichheit.「天にましますわれらが父よ，御名を崇めさせたまえ。御国を来らせたまえ。御心の天になるごとく，地にも来らせたまえ (……) 国と力と栄えとは永遠に汝のものなればなり」(It Nije Testamint 1933, Mattheüs 6：9-13 旧正書法)

(d) 'fan+{名詞/代名詞}'

所有代名詞の独立形は 'fan+{名詞句/代名詞}' によっても表現できる。

Dy boat is *fan 'e buorlju*.=Dy boat is *de buorlju harres*.「あのボートは近所の人のものです」(ULI'S B 18：20)

Hokker jas is *fan dy*?=Hokker jas is {*dines/dinen(t)*} ?「どのコートが君のですか」(ULI'S, B 18：18)

(e) その他の表現

ien fan {ûs/uzes}「私たちのひとり」

{te/by} uzes「私たちの {家/もと} で」

By uzes wie in jiermannich lyn in jonkje útfanhûs.「わが家に数年前，男の子が泊まったことがあった」(Tamminga 1973：214)

Sokken binne der *by uzes* tûzenen.「そういう人たちは私たちのところには何千人もいる」(Sitenstra 1982：134)

(f) 身体部位と所有代名詞

身体部位を表わす名詞句には，所有者が同一文中の他の文成分から明らかに特定できる場合，所有代名詞でなく，定冠詞をつけることがある。とくに所有者がドイツ語のいわゆる「自由な与格」(ド．freier Dativ) のような所有を表わす名詞句で示されている場合 (§31(5)②) や生理現象の意味ではそうである。

Ik ha pine yn *'e mûle*.「私は歯が痛い (＝口の中が痛い)」(ULI'S, B 6：10)

☞ pinemûle「歯痛」という語もある。同様に pineholle「頭痛」(← pine yn 'e holle「頭の痛み」) など。

Ik ha *de foet* stikken.「私は足を折った」(ib.)

Do bliedst út *'e noas*.「君は鼻から血が出ている」(ULI'S, C 20：7)

It swit stiet *him* op *'e holle*.「彼は頭に汗をかいている」(ULI'S, A 6：8)

De finger blette *my* juster sa.「私は昨日，指から血がたくさん出た」(ULI'S, C 20：7)

所有代名詞を用いると，「他人の〈身体部位〉ではなく，…自身の〈身体部位〉に」という対比の意味を表わす傾向がある。しかし，対比の意味を表わさずに所有代名詞を用いることもあり，それほど強い傾向とは言えない。

Hy hat in brief yn *'e hân*.「彼は手に手紙をもっている」(ULI'S, A 3：10)

☞ この場合，英語では所有代名詞をつけることが好まれる。
He has a letter in *his hand*.「同上」

⇔ Se komt it simmerhûske yn en rint nei it bêd. *Se* nimt de fersen

yn *har hannen* en lêst.「彼女は避暑地の別荘の中に入り，ベッドのほうへ行く。彼女は詩を手に取って読む」(ULI'S, A 16：8)

(3) '所有代名詞限定形＋親族名称'

(a) 所有代名詞限定形の複数形を用いる場合

相手が年上の親族である場合には，親族名称だけを用いて2人称代名詞のかわりにすること（例：heit「おとうさん」）はすでに述べた（§ 37 (3)(b)）。

一方，年上の親族を3人称として扱う場合には，オランダ語などと違って所有代名詞につねに複数形を用いるのがふつうである。たとえば，一人息子でも父親のことを話題にするときには，*myn heit「(私の)父」ではなく，ús heit「(私の)父」という。

☞ オランダ語，ドイツ語，英語では「(私の) 父」は所有代名詞に単数形を用いて次のように言う。
オ．mijn vader，ド．mein Vater，エ．my father

Us mem wie der grutsk op, dat ik sa'n goeie tsjinst hie.「母は私がとても立派に勤めたことを誇りにしていました」(ULI'S, B 2：18)

"Do hast it fan *jim pake*, dat aventoerlike." "Dat soarchlike hasto fan *jim beppe*."「君は冒険好きなところはおじいさんから受け継いだんだね」「あなたの心配症はおばあさんゆずりね」(Bangma 1993²：66)

Us beppe Jantsje wurdt moarn tachtich.「祖母のヨンチェは明日で八十になります」

Ik bin in soan fan *ús heit en mem*.「私は父と母の息子です」(ULI'S, A 1：8)

年下の親族にたいしても，親しみの気持ちをこめて所有代名詞の複数形を用いることが多い。

ús jonge「(私の) 息子」　　ús famke「(私の) 娘」

ús Trynke「(私の) {姉/妹/娘} のトリンケ」(以上 Van der Woude 1981：91, Stienstra 1982：55, ULI'S, B 1：7 変更)

Kin *ús Sytske* dan noch wol mei de bern oerkomme?「それではシツケ

が子供たちを連れてきてもだいじょうぶでしょうか」(Bangma 1993²：65)

(b) 所有代名詞限定形の単数形を用いる場合

ただし，とくに親しみの気持ちをこめるのでなければ，年下や傍系の親族について3人称の所有代名詞の単数形を用いる例が見られる。最近では，オランダ語の影響から年上の親族についても単数形と複数形の区別がはっきりしない場合も増えている。

Myn beppesizzers komme wol gauris útfanhûs.「孫たちがよく泊まりに来たりする」(Bangma 1993²：80)

Myn dochter seit pake en beppe tsjin myn âlden.「私の娘は私の両親にたいしておじいさん，おばあさんと言う」(âlden「両親」は親族名称とはいえない) (ULI'S, A 1：8)

Us mem hat trije bruorren en trije susters. Dat binne *myn omkes en muoikes*.「(私の) 母は男の兄弟が3人と女の兄弟が3人います。それは私のおじとおばです」(ULI'S, B 11：6)

It is hjoed ús heit *syn heite* jierdei.「今日は (私の) 父の父親の誕生日です」(ULI'S, A 1：8)

Dan krijt dat bern in kaart fan *syn oerbeppe*.「それからその子供はその子の曾祖母からカードをもらいます」(ULI'S, B 11：6)

(c) 所有代名詞限定形を用いない場合

とくに家族や親しい知人どうしの会話では，所有代名詞限定形をつけず，また，定冠詞もつけずに，親族名称をそのまま用いるだけで十分である。子供の会話ではそれ以外の人にもこのように表現することが多い。これは§37(3)(b)で述べたように親族名称を2人称の表現とするのと同様に，3人称としても使っていると言える。

Heit en *mem* binne by *pake* en *beppe* op besite. *Omke* en *muoike* binne dêr ek. (...) *Pake* wurdt hjoed 75 jier. (...) *Pake* kriget presintsjes. (...) Sa is de dei samar om. Dan moatte *heit* en *mem* en de bern wer nei hûs ta.「お父さんとお母さんがおじいさんとおばあさんのところに

やって来ました。おじさんとおばさんもいっしょです。(…) おじいさんは今日，75歳の誕生日です。(…) おじいさんはプレゼントをもらいます。(…) こうして一日が終わります。それからお父さんとお母さんは家に帰らなくてはなりません」(ULI'S，A 11：2)

(d) '所有代名詞＋bern'「…の子供たち」

bern「子供」は単数形と複数形が同形の名詞だが，'所有代名詞＋bern' は自分のすべての子供を指す表現として複数形で用いる。単数形で一人息子や一人娘を指したり，何人かいる自分の子供のひとりを指す表現には '所有代名詞＋ {jonkje/famke}' を用いる。

Myn bern sitte by in neef en in nicht, dat binne bern fan myn broer en skoansuster.「私の子供たちは男のいとこと女のいとこのそばにすわっています。それは私の兄(弟)と義理の兄(弟)の子供たちです」(ULI'S，A 1：8)

Myn bern antwurdzje myn frou.「私の子供たちは私の妻に答えます」(ib.)

上記の用例で '？Myn bern {sit/antwurdet} ...'「私の子供（単数）は…{すわっています/答えます}」のように単数形を用いるのは不自然である。

(e) de frou「家内」，de man「主人」

配偶者を指すときには myn のほかに定冠詞 de を用いることがある。

{*Myn/De*} *frou* hat my de hiele middei yn 'e tûn holpen.「家内が1日中庭仕事の手伝いをしてくれました」(Stienstra et al. 1982：68 変更)

Ik sil it tsjin {*myn/de*} *man* sizze, sei frou Mulder.「『主人に伝えます』とムルデル夫人は言った」(ib. 68 変更)

☞ *ûs frou「家内」，*ûs man「主人」とは言わない。

(4) 'mei＋所有代名詞限定形＋数詞' など

(a) 'mei＋所有代名詞限定形＋数詞'

「全部で…人」という表現に用いる。オランダ語と違って，関係する名詞句の人称・性・数に一致させる。

Wy binne thûs *mei ûs achten*.「私たちは8人家族だ」(Breuker et al. 1992²：79 変更)

Mei har fiven sliepe *se* dêryn.「彼らは5人でその中で寝る」(ULI'S, B 2：15)

☞ オランダ語ではつねに 'met z'n ..-en' となる。
オ．*We* zijn thuis *met z'n achten*.「同上」
Met z'n vijven slapen *ze* daarin.「同上」

☞ ただし，Hoekema (1992：12) には次の例文がある。
Se binne *mei* {*har/syn*} *beiden*.「彼らは2人連れだ」
Dat dogge wy *mei* {*ûs/syn*} *beiden*.「それは私たち2人でします」
Breuker et al. (1992²：79 f.) によれば，上記の用例の mei syn beiden はオランダ語の影響として好ましくない。

(b) op syn minst「少なくとも」，op syn meast「多くとも」

op syn minst「少なくとも」，op syn meast「多くとも」では，オランダ語の op zijn minst「同上」, op zijn meest「同上」と同様につねに syn を用いる。

Wy freegje jo dat der middeis *op syn meast* twa en jûns net mear as ien besiker by in pasjint komme.「お見舞いの方が患者さんのところに来られるのは，昼間は多くても2人，夕方は1人になるようにお願いします」(ULI'S, B 11：13 変更)

Dy jonges steane *op syn minst* fiif kear foar 't finster.「あの男の子たちはもう最低5回は窓の前に立っている」(ULI'S, A 15：14 変更)

§41 指示代名詞 (it oanwizend foarnamwurd)

(1) まとめ

場面に登場する人や物事を直接指し示したり，文脈中の要素をとくに取りたてて提示する場合には指示代名詞を用いる。指示代名詞はアクセントをもち，西フリジア語ではドイツ語などとちがって，定冠詞とは語形が異なる。

dat は中性名詞単数形のほかにもさまざまな要素を指すことができ，アクセントをもつことができない3人称代名詞 it のかわりにも用いる。

☞ 北フリジア語モーリング方言（北フ．mooring）では，定冠詞中性単数形と物事を受ける人称代名詞中性単数形の基本形は，指示代名詞中性単数形の基本形と同形の dåt（西フ．dat）である。

以下では sok，sa'n「そんな（人・物事）」，(-)selde「同じ，まさにその（人・物事）」，(-)jinge「あの（人・物事）」も扱う。

(2) 個々の語形と用例

(a) dizze [dÍzə，dÍsə，dé:zə]，dit（強調形 ditte [dÍtə]）「これ」；
dy [di]，dat [dɔt]（強調形 datte [dɔ́tə]）「それ，あれ」
強調形 ditte，datte は文中ではなく，単独で用いることが多い。

☞ -e を伴った一連の強調形に注意。
ikke(← ik)「私（主格）」，watte(← wat)「何」，hjirre(← hjir)「ここに」，dêre(← dêr)「そこに，あそこに」，wêre(← wêr)「どこに」

	両性	中性	両性	中性
単数	dizze	dit（ditte）	dy	dat（datte）
複数	dizze	dizze	dy	dy

① 限定詞として
Ik wol *dizze toffels* graach ha, *dy oare* mei 'k net lije.「私はこのスリッパがほしい。ほかのはいやだ」(ULI'S，A 14：15)

② 名詞句の一部の指示（⑥(iii)）
It gebrûk is fierders gelyk oan [*dat* yn it Frysk].「さらにその用法はフリジア語の用法と同じである」(ULI'S，A 14：16)
Dy foarmen komme dus aardich oerien mei [*dy* fan it Nederlânsk].「したがって，その形はオランダ語の形とかなり一致する」(ULI'S，A 14：15)

③ 名詞句全体の指示
とくに物事を示す名詞句の場合，人称代名詞 hy（hja/sy）または it で

これを受けるかわりに，dy または dat を用いて名詞句を明確に指し示すことがある。人を示す名詞句の場合は口語的であり，あまりていねいな表現にはならない。

Wolst my *de sûkerpot* even jaan? *Dy* stiet op it oanrjocht.「砂糖の入れ物をちょっと取ってくれない。流し台の上にあるから」(ULI'S, A 14：15 変更)

Sok sittend wurk yn 'e hûs hin, dat is neat foar my!「家にこもりっきりでやるような仕事なんて，私にはとても向かない」(ULI'S, A 19：7 変更)

④ その他の要素の指示：dat

dat は中性名詞単数形以外にさまざまな要素を指すことができる。

i) 複数の名詞，名詞複数形

Myn bern sitte by *in neef en in nicht, dat* binne bern fan myn broer en skoansuster.「私の子供たちは男のいとこと女のいとこのそばにすわっています。それは私の兄(弟)と兄(弟)の子供たちです」(ULI'S, A 1：8)

☞ オランダ語とドイツ語も同様。
オ．*Dat* zijn mijn kinderen.「それは私の子供たちです」
ド．*Das* sind meine Kinder.「同上」

ii) 名詞句以外の文成分：

Utfanhûzje, nee, *dat* liket my neat!「外泊か，いや，それは好きじゃない」(dat は不定詞 útfanhûzje「外泊する」を指す) (ULI'S, A 19：7)

☞ *Utfanhûzjen* is neat foar my.「外泊は好きじゃない」(útfanhûzjen「外泊(すること)」は útfanhûzje「外泊する」の動名詞) (ULI'S, A 19：19)

Dy wiidte mei de pleatsen en de kij is foar de bûtenlanners like *unyk* as de bergen en wetterfallen {*dat*/∅} foar ús binne.「外国人にとって農場や乳牛の姿がある平野は，私たちにとって山や滝がそうであるように珍しい」(dat は形容詞 unyk を指す) (Bosma-Banning 1981[2]：155 変更)

Wy jouwe *mear* út as {*dat*/Ø} wy fertsjinje en liene dan jild.「私たちは稼いだものより多く支出し，そうしてお金を借りる」(dat は副詞的に用いた不定代名詞 mear の原級を指す)（ULI'S，C 20：3 変更）

☞ 上の 2 例の dat はなくてもいいが，it では代用できない。

iii）文全体：

Noch altiten gongen der mear minsken mei de honger yn 'e hals op bêd as mei it liif fol. Dat feroare pas yn de 20ste ieu.「満腹でよりも腹をすかせて床に就く人のほうがまだつねに多かった。ようやく 20 世紀にそれが変わった」(ULI'S，B 3：12)

⑤ it の dat による代用

it [ət] はアクセントをもたないので，アクセントを置くときには dat で代用する（§ 37 (4)(d)）。

Us pake krijt in túť en in presintsje. {*It*/*Dat*} is in moai boek oer it âlde Fryslân「祖父はキスとプレゼントをもらいます。それは昔のフリースラントについての美しい本です」(ULI'S，A 1：13 変更)

Dy wenten wurde net iens permanint bewenne. {*It*/*Dat*} binne allegear twadde wenten.「あの家々はずっと人が住むものではない。すべてセカンドハウスだ」(ULI'S，B 11：15 変更)

とくに，主語以外の it は前域（主文の定動詞の直前）には現われず，指示代名詞 dat で代用しなければならない（§ 36 (3)(c)）。

i）他動詞の目的語の it

Ik sil {*it*/*dat*} dwaan.「私がそれをやります」

→ {**It*/*Dat*} sil ik dwaan.「それは私がやります」

☞ オランダ語とドイツ語も同様。

オ．Ik zal {*het*/*dat*} doen.「同上」

→ {**Het*/*Dat*} zal ik doen.「同上」

ド．Ich bin {*es*/*das*}.「同上」

→ {**Es*/*Das*} bin ich.「同上」

その他の用例。

Dat dogge se dêr in protte「それはそこでは大いにやる」(Bangma 1993[2]：175)

Fan de universiteit nei it stasjon is mar in lyts eintsje. *Dat* kin men wol yn in kertierke befytse.「大学から駅まではほんのわずかだ。15分もあれば自転車で行ける」(ULI'S, A 14：15変更)

ii) wêze「…である」などの補語の it

"Der is ien by de doar. Wa is dêr?" "Ik bin {*it/dat*}, de post."「(それは) 私です。郵便局の者ですが」(Bosma-Banning 1981[2]：11変更)

→ "{**It/Dat*} bin ik, de post."「同上」

☞ オランダ語とドイツ語も同様。

オ. Ik ben {*het/dat*}.「それは私です」

→ {**Het/Dat*} ben ik.「同上」

ド. Ich bin {*es/das*}.「同上」

→ {**Es/Das*} bin ich.「同上」

⑥ dat と it の相違

dat と it にはアクセントをもつか否かのほかに次のような相違があり，互いに置き換えることができない場合がある。

i) 非人称の it や慣用句の形式的な it

非人称の it や慣用句の形式的な it は指示するものがないので dat で代用できない (§ 37 (5))。

{*It/*Dat*} is simmer.「夏です」

Hjir wennet {*it/*dat*} goed.「ここは住みやすい」

{*It/*Dat*} dûzelt my yn 'e holle.「私は頭が痛い」

Ik ha {*it/*dat*} sa drok.「私はとても忙しい」(it drok hawwe「忙しい」)

→ {**It/*Dat*} ha ik sa drok.「同上」

☞ it iens wêze「賛成である」の it は本来，慣用句の形式的な it のはずだが，dat で置き換えた用例も見られる。

Binne jo *it* dêr mei iens?「あなたはその点にかんして賛成ですか」(ULI'S, B 13：12)

Dêr bin ik *it* mei dy oer iens.「それにかんして私は君に賛成だ」
⇔ Nee, *dat* bin 'k mei dy iens.「いや，私は君に賛成だ」(Bangma 1993[2]：175)

☞ オランダ語も同様。
Bent u *het* daarmee eens?「同上」
Daar ben ik *het* met u over eens.「同上」
⇔ Nee, *dat* ben 'k met jou eens.「同上」

ii) 不定詞句や文をあらかじめ示す it

不定詞句や文をあらかじめ示す it は，先行する文脈に現われていない未知の要素を示すので，指示代名詞 dat で代用するのは不自然である場合が多い（§ 37 (4)(d)④）。

{*It*/**Dat*} is tige slim (om) in parkearplak te finen.「駐車場を見つけるのはとてもむずかしい」(ULI'S，A 8：11 変更)

{*It*/**Dat*} muoit my dat ik it sizze moat.「私はそのことを言わなければならないのが残念だ」(ULI'S，B 2：13 変更)

iii) 名詞句の一部を代用する場合

独立用法において dat は名詞句の一部を指すことができるが，it は名詞句全体を受けることしかできない（②）。この点が人称代名詞と指示代名詞の統語論上の重要な相違である。

It gebrûk is fierders gelyk oan [{**it*/*dat*} yn it Frysk].「さらにその用法はフリジア語の用法と同じである」(ULI'S，A 14：16 変更)

これは他の 3 人称代名詞でも同様である。

Dy foarmen komme dus aardich oerien mei [{**harren*/*dy*} fan it Nederlânsk].「したがって，その形はオランダ語の形とかなり一致する」(ULI'S，A 14：15 変更)

☞「代名詞の der」（§ 55）も名詞句の一部を代用することはできない。
It gebrûk is fierders gelyk [{**deroan*/**dêroan*} yn it Frysk].「同上」
Dy foarmen komme dus aardich oerien [{**dermei*/**dêrmei*} fan it Nederlânsk].「同上」

(b) sok [sok], sa'n [san]「そんな（人・物事）」など

① 限定用法（§ 34 (2)(a)⑥）

可算名詞：sa'n [san]（＋単数形）　sokke [sókə]（＋複数形）

不可算名詞：sok [sok]（＋中性名詞）　sokke [sókə]（＋両性名詞）

Sa'n helper is yn *sokke* tiden goud wurdich.「そういう助っ人はそんなときには金ほどの値打ちがある」(ULI'S, A 13：8)

Sa'n soad ferskaat soe eins alhiel net nedich wêze.「それほど大きな格差は本来まったく不要なはずだ」(← in　soad「多くの」) (ULI'S, C 11：7)

Sok dreech iten kin ik net oer.「そんなくどい食事は私はかなわない」(ULI'S, C 20：12)

Sokke wyn mei ik net lije.「そんなワインは私はきらいだ」

Sokke fersen moatte in goeie bân hawwe.「そういう詩は立派な装丁にしなければならない」(ULI'S, A 16：8)

抽象名詞は可算名詞ではないが，具体的な事例を指す場合には sa'n を用いることがある。

抽象名詞　sa'n（＋単数形）

sokke（＋両性名詞単数形）　sok（＋中性名詞単数形）

Ik hâld net fan {*sokke/sa'n*} gûchelerij.「私はそんないんちきは好きではない」(Hoekema 1992：13)

② 独立用法

「そんな人」：sok ien [sok iən]（単数）　sokken [sókən]（複数）

「そんな物事」：soks [soks]（単数）　sokken [sókən]（複数）

「そんな何か」：sokssawat [sóksavɔt]（単数）

Soks giet hurd oer de buorren.「そういうことはすぐに村中に知れわたる」(ULI'S, B 1：7)

Jo kinne *sok ien* net fertrouwe.「そんな人は信用できない」

Ferkeapje wolle, dêr tinke *sokken* allinne mar om.「ものを売りつけようとする，ああいう人たちはそれしか考えない」(Bangma 1993²：29)

Sokken binne der by uzes tûzenen.「そういう人たちは私たちのところには何千人もいる」(Stienstra 1982：134)

Ut en troch stroffelet er oer in stientsje of *sokssawat*.「ときおり彼は小石か何かにつまづく」(ULI'S, B 11：11)

③ sa'n の他の用法

'sa'n＋数詞' は「約…」という意味の表現になる。

Yn Fryslân lizze *sa'n 400* grutte en lytse doarpen.「フリースラントには約 400 の大小の村々がある」(ULI'S, C 1：7)

No skriuwe de dokters yn us lân wol *sa'n 3500* soarten medisinen foar oan harren pasjinten.「今，私たちの国の医者はおよそ 3500 種類もの薬を患者に処方している」(ULI'S, C 11：7)

感情的な意味をこめる場合にも用い，'sa'n＋｛不可算名詞/複数名詞｝' でもかまわない。

Sa'n waar hie gjin mins op rekkene.「こんな天気なんてだれも予想していなかった」(waar「天気（不可算名詞）」)（Hoekema 1992：14)

Alderraarst *sa'n* postsegels at er hie「あの人ががこんなに（たくさん）切手をもっていたなんて」(postsegels「切手（複数形）」)（Hoekema 1992：14)

☞ Boersma/Van der Woude (1980²：32) には可算名詞単数形にも sok in を用いた表現が挙がっているが，一般的ではない。
sok in ｛man/hûs｝「そんな｛男の人/家｝」(ib. 32)
オランダ語でも 'zulk een＋可算名詞単数形' は文語的である。
sa'n は 'sa＋in（＝不定冠詞）' に由来し，語形的に疑問詞 hoe'n（← hoe＋in)「どんな」に対応する。sa'n は不定冠詞を伴うことからわかるように，本来，可算名詞とともに用いる表現だが，上記のように用法が拡大している。wat in にも同様の傾向がある（§ 44 (6))。

☞ sok はオランダ語の zulk，ドイツ語の solch，英語の such に対応する。
sa'n はオランダ語の zo een，ドイツ語の so ein に対応する。

(c) (-)selde(n) [..sɛ́ldə(n)]「同じ（人・物事），まさにその（人・物事）」

① (-)selde [..sɛ́ldə]「同じ（人・物事），まさにその（人・物事）」

定冠詞や指示代名詞につける。

'定冠詞＋-selde': deselde, itselde

'指示代名詞＋(-)selde': ditselde, dyselde, datselde

dizze selde, (前置詞＋)'e selde

Fan generaasje op generaasje wennen hja yn *itselde* doarp.「何世代にもわたって彼らは同じ村に住んでいた」(ULI'S, C 11：2)

Oare fabriken kinne *datselde* middel net samar neimeitsje.「他の工場は同じ薬をまねして作るわけにはいかない」(ULI'S, C 11：7 変更)

Ik leau, ús ynteresses binne net alhiel *deselde*.「思うに私たちの興味はまったく同じだというわけではないようだ」(Bangma 1983²：139)

Wy neame alle fjouwer *itselde*.「私たちは 4 人とも同じものにします」(Bangma 1993²：132)

② (-)selden [..sɛ́ldən]「同じ人たち，まさにその人たち」

独立用法で複数の人を意味する。

It binne altyd *deselden* dy't kleie.「文句を言うのはいつも同じ連中だ」(Hoekema 1992：14)

③ '不定冠詞＋selde'

in selde「同じ種類の（人・物事），それに相当する（人・物事）」

(d) jinge [jǐŋə]「あの」，-jinge(n)「…の人・物事」

① jinge「あれ」(文語的)

dizze en jinge「いろいろ(な)，あれこれ(の)」という表現に限られ，この意味ではむしろ不定代名詞に属する。

② -jinge(n)

dejinge/dyjinge（単数），dejingen/dyjingen（複数）「…の人」; itjinge, datjinge「…の物事」

関係文を伴い，関係詞の先行詞になる。ただし，文語的であり，ふつうは dyselde, datselde などを用いる。

Dat is {*dyjinge*（文語的）/*dyselde*} dy't it my ferteld hat.「この方が私にそれを知らせてくれた人です」(Boersma/Van der Woude 1980²：32

変更)

次の用例では deselden dy't と dyjingen dy't が同じ文の中でともに用いられている。

Deselden dy't eigen dosinten dookje en jookje, joegen oan dat dy (jongere) dosinten dy't har mei de foarnamme foarstelden, of *dyjingen dy't* se privee goed koenen, doke waarden; de oaren waarden joke. 「自分たちの先生を do で呼んだり jo で呼んだりするという人たちは，ファーストネームで自己紹介する(若い)先生や，個人的によく知っている先生を do で呼ぶのであり，他の先生は jo で呼ぶと記した」(De Boer 1986：112)

§ 42　不定代名詞 (it ûnbeskate foarnamwurd)

(1)　まとめ

不特定の人や物事を示す代名詞を不定代名詞という。独立用法と限定用法で用い，名詞句から遊離した位置に現われることもある。以下では men [mən]「(話者を含めて一般的に) 人」など，おもなものを記す。疑問文，関係文，否定文で用いるものはそれぞれの章で扱う。

(2)　men [mən]「(話者を含めて一般的に) 人」

(a)　語形と意味

主格は men [mən]，目的格は jin [jən, jIn]，所有代名詞限定形・独立形は jins [jə^{n}s, jI^{n}s] である。単数の扱いを受ける。

☞ jin, jins の発音表記は WFT 10 (1993:67)には jin [jIn, jön], jins [jI^{n}s, jö^{n}s] とあり，Zantema (1985:46) には jin [jən], jins [jə^{n}s] とあり，一定しない (§ 40 (1))。

オランダ語の men やドイツ語の man と違って，意味的に話者を含む。話者を含まない表現には使えない。

Ik kin mysels moai bedrippe en wêr sil 'k dan sa'n drokte om meitsje. *Men* moat op 't lêst gjin slaaf fan *jins* eigen wurk wurde, no?「けっこう

暮らしていけるし，そんなにせかせかして何になるんだい。自分の仕事の奴隷になったらおしまいだよ」(ULI'S, B 11：13)

したがって，次の文は正式なフリジア語とは認められない。

**Men* seit dat er al fuortgien is, mar ik bin der net wis fan.「彼はもう行ってしまったそうだが，私はよく知らない」('Der wurdt sein dat..'（受動態），'Se sizze dat..'（3人称複数不定の se）などと言いかえる必要がある）

*Oant likernôch 1100 iet men yn Fryslân wakker ientoanich.「1100年頃までフリースラントでは人々の食事はかなり単調だった」

この点で men は意味的には3人称的というより，1人称的と言える。次の用例では men が1人称代名詞と交互に用いられている。

Ien fan de belangrykste dingen dy't *wy* foar it Frysk dwaan kinne is om sa folle mooglik *ûs* brieven yn it Frysk te skriuwen. Dat *men* mei *jins* famylje of froenen yn 't Frysk briefket sprekt hast wol fansels. Mar ek yn saaklike brieven moatte *wy ûs* net skamje om *ûs* eigen taal te brûken. Sis dan net sa gau, dat *men* mei it Frysk net sa fier komt! Dat falt ornaris gâns ta.「フリジア語のために私たちができるもっとも大切なことのひとつは，フリジア語で手紙を書くことです。家族や友人とフリジア語で手紙のやりとりをするのはほとんど当然ですが，実用的な手紙でも私たち自身の言葉を使うのを恥じらってはなりません。ですから，フリジア語ではやっていけないなどと早々と言ってはいけません。ふつうは思っているよりもずっとうまくいくものです」(Stienstra 1982：45)

☞ 次の表現でオランダ語との対応表現に注意（ULI'S, B 18：14)。

フ．Soks docht *men* net.「そういうことはするものではない」

オ．Zoiets doe *je* niet.「同上」

フ．*Der wurdt sein* dat er fuortgiet.「彼は行ってしまうそうだ」

オ．*Men zegt* (＝Ik weet niet) dat hij weggaat.「同上」

西フリジア語でも2人称代名詞 do，jo や3人称代名詞複数形を「(一般的に）人は」の意味で用いることがある（Hoekstra/Tiersma 1994：515)。

歴史的に西フリジア語の men が話者を含む意味になったのは 18 世紀以降のことであり，それ以前には話者を含む意味の用例も含まない意味の用例も見られる（Krol 1985：18 ff.）。

☞ 歴史的に men [mən] はオランダ語の men [mən] と同様に，man [mɔn]「男（単数形）」の発音上の弱形から発達した代名詞である（Krol 1985：3 ff.）。したがって，あいまい母音 [ə] を含み，*[mɛn] とは発音しないことに注意。en [ɛn]「そして」の発音と比較。

(b) 目的格 jin [jən, jIn]，所有格 jins [jə^{n}s, jI^{n}s] の用法

men を受ける目的格，所有格にはそれぞれ jin，jins を用いる。

Men moat *jin* foar *jins* flaters skamje.「自分の誤りは恥じるべきだ」(Stienstra 1987：60)

Men moat *jinsels* hieltiden wer ôffreegje wat de reklame fan de lêzer wol.「広告が読者から何を望んでいるかつねに再度自問してみる必要がある」(ULI'S，B 10：7)

一方，immen/ien「だれか（目的格）」((3)(g))，syn「だれかの」(§ 40 (1)) は men 以外の要素を受ける。

immen jins dochter ta frou jaan「だれかに自分の娘を嫁にやる」(Zantema 1984：1023)

☞ ドイツ語との相違に注意。

フ．*Men*$_{i}$ moat {*jins*$_{i}$/**syn*$_{i}$} wurd hâlde.「自分でした約束は守らなければならない」

ド．*Man*$_{i}$ muß *sein*$_{i}$ Wort halten.「同上」

☞ あたかも jin，jins は men の再帰代名詞にあたり，非再帰的に用いる immen/ien，syn と区別があるように見える。じっさい，辞書には再帰動詞は jin skamje「恥じる」，jins wurd hâlde「約束を守る」と示される。しかし，次の用例の men と jin は同一の単文に属していない。

Wat *men* net wit, dat deart *jin* net.「自分の知らないことは心を傷つけない（＝知らぬが仏。ことわざ）」(Beintema 1990：26)

immen/ien，syn と jin，jins の相違は men にたいする再帰代名詞か否かという統語的な違いではなく，「だれか」と「(話者を含めて一般的に) 人」という意味上の違いに基づくといえる。

(3) その他の語形と用法

(a) al [ɔl], alle [ɔ́lə]「すべて(の)」, alles [ɔ́ləs]「すべて(の)」

限定用法では形容詞の変化に従わないことに注意。

① al＋{限定詞＋名詞/関係文}

Beppe breidet altyd *al ús sokken*.「祖母はいつも私たちの靴下を全部編みます」(Bangma 1993²：59)

Al wa't komt, is wolkom.「いらっしゃる方はみな歓迎です」(Boersma/Van der Woude 1980²：34)

☞ ②の用例と比較。

② alle＋(形容詞)＋名詞

名詞の性・数には無関係に alle を用いる。

{alle/*al} wyn「すべてのワイン」(de wyn「ワイン」)

{alle/*al} bier「すべてのビール」(it bier「ビール」)

{alle/*al} talen「すべての言語（複数形）」(de taal「言語」)

Alle bern wolle in sliepkeamer.「子供たちはみな（自分専用または共同の）寝室をほしがっている」

名詞句から遊離した位置に現われることもある。

De bern wolle *alle* in sliepkeamer.「同上」

☞ 次の用例と比較。

De bern wolle {**al/allegear(re)*} in sliepkeamer.「同上」

☞ '{Elk bern.../De bern...elk...}'((c))との意味の差に注意。

Mei *alle* oaren hat er net folle gedoente.「彼はその他の人たちとは皆つき合いが多くない」(ULI'S, C 1：14)

Alle begjin is swier.「はじめはみなむずかしい」(it begjin「はじめ」)(Beintema 1990：77)

Alle nijs is lang gjin nijsgjirrich nijs fansels.「すべてのニュースがみな興味をそそるニュースだというわけではもちろんない」(it nijs「ニュース」) (Bangma 193²：123)

Alle dy't komme, binne wolkom.「いらっしゃる方はみな歓迎です」

☞ 次の用例および①の用例と比較（§ 45 (2)(c)①）。
{*Alle* wa't/*allegear(re)* dy't} komme, binne wolkom.「同上」

③ alles

Alles fielde wiet.「何もかも濡れていた」(ULI'S, A 6：8)

④ 前置詞（＋人称代名詞）＋allen

Dizze auto is *fan ûs allen*.「この車は私たち全員のものです」

yn allen「全般的に，全体として見れば」

☞ フ．wy {allegear (re)/*allen}「私たち全員」
⇔オ．wij allen「同上」

(b) beide，beiden「両方(の)」

① beide

②以外の場合に用いる。

De *beide* kearen dat in rivier myn paad krûste hâld ik dan ek midden op 'e brege.「川が道と交差したその 2 回とも私は橋の上で立ち止まった」(ULI'S, B 20：15 変更)

Ik drink meast wite wyn of reade... Ik mei *beide* wol.「私はたいてい赤ワインか白ワインを飲むけど…両方とも好きなの」(Bangma 1993[2]：8)

Wy nimme *beide* in kofje.「私たちは 2 人ともコーヒーにします」(ib. 10 変更)

② '前置詞＋所有代名詞＋beiden'

Se komme *mei har beiden*.「彼らは 2 人そろって来る」

Ien *fan ûs beiden* sil komme.「私たち 2 人のうちどちらかが伺います」

☞ オランダ語と同様に*beides という語形は存在しない。beides「両方の物事」を用いるドイツ語との違いに注意。

(c) elk (e) [ɛ́lk (ə)]/elts (e) [ɛ́lts (ə)]，ider [ídər]「おのおの(の)」

限定用法では形容詞の変化に従う。

Elk bern wol in sliepkeamer.「どの子供も（自分専用の）寝室をほし

がっている」(bern は単数形)

名詞句から遊離した位置に現われることもある。次の用例の名詞句 de bern「子供たち」が複数形であることに注意。

De bern wolle *elk* in sliepkeamer.「子供たちは各自（自分専用の）寝室をほしがっている」(ULI'S, A 2：9)

☞ '{Alle bern../De bern...alle..}' ((a)②) との意味の差に注意。

Elk is himsels de neiste.「だれでも自分がいちばんかわいい（＝近い）」(Beintema 1990：33)

De farmaseutyske yndustry is kommersjeel fan opset, krektlyk as *eltse* oare yndustry.「製薬会社は商業的に他のいずれの企業とも全く同じ目標をもっている」(ULI'S, C 11：7)

名詞句から遊離した位置に現われた elk, ider はそれぞれ接尾辞 -mis, -s を伴うことがある。

De famkes krigen {*elk(mis)* [ɛ́lk(məs)]/*ider(s)* [ídər, (ídəs)]} twa blommen.「女の子たちはひとりひとり風船をふたつもらった」(Hoekstra 1989：9 変更)

☞ k が口蓋化を受けていない elk は本来，オランダ語的な語形（オ．elk）である。英語の each に対応する。

(d) folle [fɔ́lə]「多く(の)」

次の用法に限られる。肯定文で「多く(の)」の意味で用いることができないことに注意。その場合には in soad [ən soət], in protte [ən prɔ́tə], in bulte [ən bø̃ltə] を用いる((k))。

① 否定文

Der is *net folle* romte mear.「もうそんなに空きがない」(ULI'S, B 11：15)

Ik wit der ek *net folle* fan.「私もそれについてはあまり知らない」(Stienstra 1982：46 変更)

Folle minsken wiene der *net*.「あまり人は多くなかった」(ib. 46)

☞ オランダ語やドイツ語では「多く(の)」にオ．veel，ド．viel を用い，「わずか(の)」にオ．weinig，ド．wenig を用いる。一方，西フリジア語では「多く(の)」に in soad，in protte，in bulte を用い，「わずか(の)」に net folle を用いる。西フリジア語にはオ．weinig，ド．wenig に語形的に対応する語がないことに注意。

② 'folle＋比較級'

Us hiele maatskippijstruktuer is *folle demokratysker* wurden.「私たちの社会構造全体がずっと民主的になった」(ULI'S，C 11：5)

De toer is *folle heger* as it hûs.「塔は家よりもずっと高い」(ULI'S，C 1：15)

③ tefolle「あまりに多く(の)」，safolle「それほど多く(の)」，hoefolle「どれほど多く(の)」

Tefolle sûker wurket ûngeunstich foar it bloed.「砂糖のとりすぎは血液に悪く作用する」(ULI'S，C 11：15)

Hy hat syn fantasije *tefolle* brûkt.「彼は想像力を使いすぎた」(ULI'S，C 20：5)

Dit boek kostet my *te folle*.「この本は私にはあまりに高価だ」(Stienstra 1982：46 変更)

Der binne net *safolle* skoallen yn dat doarp「その村にそれほどたくさん学校はない」(ULI'S，C 1：15)

Soe it wier *safolle* skele?「本当にそれほど違うものでしょうか」(Bangma 1993²：83)

Tink der marris om *hoefolle* froulju in broek oan ha.「どれだけ多くの女性がズボンをはいているか考えてもみなさいよ」(Bangma 1993²：26 変更)

Hoefolle fertsjinnesto dêr?「君はそこでどのくらい稼いでいるんだ」(Stienstra 1982：46)

(e) genôch [gənɔ́:x]「十分(な)」

限定用法では名詞句の直前または直後に置く。

Boer Dykstra hat lân *genôch*.「農夫のディクストラには土地が十分ある」(ULI'S, B 11：13)

Ik tocht dat wy noch *genôch* sokken en broeken hienen.「まだ靴下やズボンは十分あると思ったが」(ULI'S, A 4：8)

Kin ik jo ek noch ien ynskinke? —Nee tankewol, ik ha *genôch* hân.「もう一杯お注ぎしましょうか」「いえ結構です，もう十分いただきました」(Bangma 1993²：20)

☞ genôch はオランダ語の genoeg，ドイツ語の genug，英語の enough に対応する。

(f) guon [gwon]「何人か(の)，いくつか(の)」

guodden(s) [gwɔ́dən, (..ə^{n}s)]，guods [gwots] などの語形もある。

Op *guon* plakken rydt de bus mar in kearmannich deis.「なかには一日にバスが数回しか走らないところもある」(ULI'S, C 20：9 変更)

Guon trouwe ek nochris yn 'e tsjerke.「教会で結婚式を挙げる人たちもまだ何人かいる」(ULI'S, B 1：7)

Binne der ek noch *guon* dy't wat freegje wolle?「何か聞きたい人はまだ何人かいますか」(ULI'S, B 18：20)

(g) ien [iən]，immen [Ímən] (文語的)「だれか」

ともに独立用法で用いる。

① 用例

Lit jo brief sjen oan *ien* dy't Frysk skriuwe kin.「あなたの手紙をだれかフリジア語が書ける人に見せなさい」(ULI'S, A 14：8 変更)

Der is *ien* by de doar.「ドアのところにだれかいる」(ULI'S, B 18：14)

Is der noch *immen* dy't wat drinke wol?「まだ何か飲みたい人はいますか」(ULI'S, B 18：18 変更)

② ien，immen を受ける代名詞 hy など

ien，immen を受ける代名詞には hy/er，him，syn を用いる。men

((1)) とちがって jin, jins は用いない。

As *immen* in nij hûs bouwe wol, moat *er* earst spikers telle.「新しい家を建てようと思う者はまず釘の数をかぞえなければならない（＝無理な望みは禁物。ことわざ）」(Beintema 1990：65)

③ 否定形 net ien（← ien），nimmen [nĺmən]（← immen）（文語的）「だれも…ない」

Net ien kin altyd alhiel syn sin krije.「いつも完全に自分の意見が通る人はだれもいない」(ULI'S, B 11：17)

Ik ha *net ien* sjoen.「私はだれにも会わなかった」(ULI'S, B 18：14)

Nimmen is grut dy't grut is yn eigen eagen.「自分で（＝自分の目で見て）偉大だと思っている者はけっして偉大ではない（ことわざ）」(Zantema 1984：653)

☞ *net immen「だれも…ない」は不可。

④ '(in＋) 不定代名詞（-en-）ien'（独立用法，単数）「…の人・物事」(§ 34 (3)(a))

De Gouden Ieu wie net foar *elkenien* in gouden tiid.「『黄金の世紀』（＝オランダ 17 世紀）はどんな人にとっても黄金時代というわけではなかった」(← elk「おのおのの（人・物事）」) (ULI'S, B 3：11)

Hast *eltsenien* is oanwêzich.「ほとんどすべての人が居合わせている」(← elts「おのおのの（人・物事）」) (ULI'S, A 17：7)

Mannichien, dy't syn of har wurk yn 'e stêd hat, wennet op in doarp yn 'e omkriten fan dy stêd.「都市で仕事に就いている人の多くはその都市の周辺の村に住んでいる」(← mannich「多く(の)」) (ULI'S, C 11：2 変更)

Neidielen binne der fansels ek. Om *in inkeldenien* te neamen, de huzen steane meastentiids leech.「もちろん欠点もある。そのいくつかを挙げれば，まず，家々がほとんどいつも空であることだ」(← inkeld「いくつか(の)」) (ULI'S, C 11：3)

Op feesten wurdt ornaris de flagge útstutsen. Hiel faak is dat de

Nederlânske trijekleur, mar ek gauris sjocht men *in oarenien*.「祝日にはふつう旗が掲揚される。それはたいていオランダ三色旗が多いが，ほかのものが見られることもある」(←oar「他の（人・物事）」) (ULI'S, C 20：7)

☞ ien はドイツ語の einer，英語の one に対応し，immen はオランダ語の iemand，ドイツ語の jemand に対応する。

(h) in bytsje [ən bít∫ə]「少し(の)」

Hy wie der *in bytsje* ferlegen mei.「彼はそれにいささか当惑した」(ULI'S, B 3：17)

Platte lannen binne der mar *in hiel lyts bytsje* op 'e wrâld.「平らな国は世界中にほんの少ししかない」(Bosma-Banning 1981²：154)

☞ in bytsje はオランダ語の een beetje，ドイツ語の ein bißchen，英語の a bit に対応する。

(i) in pear [ən pIər]「二，三（の），少し(の)」

Ik ha noch al *in pear* hobbys.「私にはまだいくつか趣味がある」(ULI'S, A 19：7 変更)

As bern bin 'k al begûn postsegels te sammeljen. No keapje ik wol ris *in pear*.「もう子供のころから私は切手を集めはじめた。今でも数枚買うことがある」(ULI'S, A 19：7 変更)

☞ in pear はオランダ語の een paar，ドイツ語の ein paar に対応する。

(k) in soad [ən soət], in protte [ən prótə], in bulte [ən bøltə]「多く(の)」など

① 用例

可算名詞にも不可算名詞にも用いる。3 者の用法上の差はとくになく，ニュアンスの差にとどまる。

Der wenje {*in soad*/*in protte*/*in bulte*} minsken yn de stêd.「その都市にはたくさんの人が住んでいる」(ULI'S, C 1：15)

In protte wurk sil dien wurde moatte.「たくさん仕事がなされなければならないだろう」(ULI'S, B 14：13 変更)

Om't it wetter doe ek al aardich fersmoarge wie, waard der *in soad* bier dronken.「当時はまた水がかなり汚れていたので，ビールがたくさん飲まれた」(ULI'S, B 3：11)

Foaral lytse doarpen hat Fryslân *in soad*.「とくに小さな村がフリースラントには多くある」(ULI'S, C 11：2 変更)

Dy't *in bulte* begrypt, kin *in bulte* ferjaan.「多くを理解する者は多くを許せる（ことわざ）」(Beintema 1990：14)

② その他の表現

上記の 3 者以外にも「多く(の)」を意味する口語的な表現がある。

De stedman hat *in knoarre* jild.「あの都会の人はたんまりお金をもっている」(ULI'S, C 1：15)

Mar heit fynt 100.000 gûne *in slompe* jild.「しかし，父親は 10 万ギルダーは大金だと思う」(ULI'S, A 2：14)

Der wie *in smite* folk op it iis.「(張りつめた) 氷の上にはたくさんの人たちがいた」(ULI'S, C 1：15)

(l) inkel(de) [Íŋkəl(də)]「いくつか(の)，何人か(の)；ひとつ(の)」

Ik tink dat wy fan sneon op snein wat wetter krije en dêrmei *inkelde* buien.「土曜日から日曜日にかけて雨が降り，そのさい少しにわか雨があると思われます」(Bangma 1993[2]：113)

Der binne minsken, dy't gjin *inkelde* wichtige wedstriid oerslaan kinne.「重要な試合はひとつも逃せないという人たちがいる」(ULI'S, A 11：5 変更)

(m) mannich [mɔ́nəx, mánəx]（＋名詞単数形)「多く(の)」

① 用例

Mannich klaaidoarp is ûntstien yn 'e tiid, doe't der noch gjin seediken wiene.「クラーイ地方（フリースラント西部の粘土質地域）の村の多くはまだ堤防がなかった時代に成立した」(ULI'S, C 11：2 変更)

② in stikmannich [ən stĺkmɔnəx, ..manəx]「いくつか(の)」

Wy ha *in stikmannich* wichtige oarsaken neamd fan de hjoeddeiske wurkleazens.「私たちは今日の失業の重要な原因のいくつかを挙げてみました」(ULI'S, C 20：3 変更)

Neist syn tsien kij hat er ek noch *in stikmannich* skiep.「10 頭の雌牛のほかに彼は羊も数頭もっている」(ULI'S, B 11：13)

③ 'in...mannich'「いくつかの…」

Foar *in jiermannich* soe de ferbining fan Snits nei Starum opdoekt wurde.「何年か先にはスニツ（オ．Sneek スネーク）からスタールム（オ．Stavoren スタヴォーレン）に至る交通網（＝鉄道）は廃止されるかもしれない」(ULI'S, C 20：9 変更)

It hat al *in wykmannich* wintere.「すでに二，三週間，冬の天気が続いた」(ULI'S, B 5：11)

De bus rydt mar *in kearmannich* deis.「バスは一日に数回しか走っていない」(ULI'S, C 20：9 変更)

☞ mannich はオランダ語の menig，ドイツ語の manch，英語の many に対応する。

(n) oar [oər], oare [ɔ́ərə], oaren [ɔ́ərən]「ほか(の)」

限定用法では形容詞の変化に従う。

Soms fytste ik jûns nei iten troch it fjild om nei in *oar* syn wurk te sjen.「ときどき私は夜，食事の後でほかの人の仕事のようすを見に野原を通って自転車で行くことがあった」(ULI'S, B 0：6)

Ik keapje yn it iene winkeltsje dit, yn it *oare* dat.「私はある店でこれを買い，他の店であれを買うという具合だ」(ULI'S, A 10：8)

Foar guon minsken is dat lestich, *oaren* fine it noflik.「ある人たちにとってそれはいやなことだが，すてきだと思う人たちもほかにいる」(ULI'S, B 4：7)

☞ 副詞 oars [oəs]「ほかに，異なって，そうでなければ」

By de lytse winkeltsjes is dat *oars*.「小さい店ではそれは違う」(ULI'S, A 10：8)
Om 1878 hinne gie dat gâns *oars* as hjoeddedei.「1878 年頃は今日とはまったく違っていた」(ULI'S, C 20：2)
Oars nimme wy in lekkere cocktail.「そうでなかったら，おいしいカクテルをもらおう」(Bangma 1993[2]：7)

(o) wat [vɔt] (口語的), eat [Iət] (文語的)「何か・いくつか・少し(の)」
Hast *wat* sjoen?「君は何か見たのか」(ULI'S, B 18：14)
Op it taffeltsje lizze *wat* tydskriften en *wat* folders.「テーブルの上に雑誌が数冊とパンフレットがいくつか置いてある」(ULI'S, B 6：8)
As de moade mei *wat* nijs foar 't ljocht komt, wurdt dêr earst *wat* om lake.「流行が何か新しいものをたずさえて登場すると，最初はいささか物笑いの種になる」(ULI'S, C 11：7 変更)
Wy allegearre, de iene *wat* mear en de oare *wat* minder, dogge mei oan de moade.「人によって多少の差はあるにしろ，私たちは皆流行とかかわりがある」(ULI'S, C 11：4)
'Dizze' wurdt brûkt foar *eat* dat tichtby is en 'dy' foar *eat* dat fierôf is.「dizze は近くのものに用いられ，dy は遠くのものに用いられる」(ULI'S, A 14：15)
☞ eat はオランダ語の iets，ドイツ語の et(-was) に対応する。

(p) hiel wat [hiəl vɔt]「多く(の)」
Op *hiel wat* doarpen is hjoeddedei in toanielferiening.「多くの村に今日では劇団がある」(ULI'S, C 20：9)
De doarpen nimme *hiel wat* oer fan de stêd.「村は都市から多くのものを譲り受けている」(ULI'S, C 11：2)

§43　疑問詞（it fraachwurd）

疑問詞には疑問代名詞と疑問副詞がある。便宜上，両者とも扱う。個々の用例は§44で示す。

(1)　疑問代名詞（it freegjend foarnamwurd）

(a)　wa［va:］「だれ」など

①　語形

wa［va:］「だれ（主格・目的格）」

wa's［va:s］，waans［va:ⁿs］，wannes［vánəs］（＋名詞）「だれの」

wa syn（＋名詞）「だれの」，wa har（＋名詞）「（とくに女性の場合）だれの」

wa sines「だれのもの」，wa harres「（とくに女性の場合）だれのもの」

☞ 最近ではオランダ語の影響でwa「だれ」のかわりにwieが用いられることがある。

②　'前置詞＋wa'

wa「だれ」が前置詞を伴う場合は'前置詞＋wa'で表わす。

Mei wa hat er juster dûnse?「彼は昨日だれと踊ったのだろう」

Ik wit net *mei wa't* er juster dûnse hat.「私は彼が昨日だれと踊ったか知らない」

'wêr…前置詞'は人を表わす代名詞の場合には好ましくないとされる。ただし，口語ではwêrを用いた表現も用いられる傾向にある。とくに従属文ではその傾向が強い。

Njonken wa sille wy sitte?「だれの横にすわりましょうか」（Tiersma 1985：117）

⇔ *Wêr* sille wy *njonken* sitte?「同上」（ib. 118）

☞ 関係詞dêr't も同様（§45(3)(b)①）。

＊'wa..前置詞'は不可。

＊ *Wa* hat er juster *mei* dûnse?「彼は昨日だれと踊ったのだろう」

☞ ただし，waにとくに強いアクセントを置いて相手の言った文をそのまま

聞き返す「問い返し疑問文」(echo-fraachsin, § 44 (4)(b)) では，'wat... 前置詞' が現われる。
"*Dyn frou* hat er juster *mei* dûnse." "*Wa* [vá:] hat er juster *mei* dûnse?"「彼は昨日君の奥さんと踊ったぞ」「だれと踊ったんだって」

(b) wat [vɔt] (強調形watte [vɔ́tə])「何（主格・目的格)」と 'wêr [vɛ:r] (...) 前置詞'

① 用例

Wat betsjut dit wurd?「この単語はどういう意味ですか」

Wat soe hy bedoele?「彼の言っていることはどういう意味なのだろう」

② 'wêr [vɛ:r] (...) 前置詞' ((2)(b)②)

wat「何」が前置詞を伴う場合には，ふつう wêr と前置詞が分離する。前置詞は文末，あるいは文末の動詞や分離動詞の前綴りの直前に置く。

Wêr hast dyn brief *mei* skreaun?「君は何を使って手紙を書いたのか」

ただし，wêr と前置詞が分離しないこともオランダ語の影響で多くなってきている。とくに論理関係や付帯状況のように述語との意味的な結びつきが弱い付加成分（de adjunkt）の場合には，wêr と前置詞は分離しない。

Wêrtroch binne de prizen omheech gien?「何の原因で物価が上がったのだろう」(ULI'S, C 11：3 変更)

☞ 関係詞 'der't... 前置詞' も同様（§ 45 (3)(b))。

*'前置詞＋wat', *'wat... 前置詞' は不可。

**Mei wat* hast dyn brief skreaun?「同上」

**Wat* hast dyn brief *mei* skreaun?「同上」

☞ ただし，wat にとくに強いアクセントを置いて相手の言ったことをそのまま聞き返す「問い返し疑問文」(echo-fraachsin, § 44 (4)(b)) では，'wat... 前置詞' が現われる。
"*Mei dyn pinne* ha ik myn brief skreaun." "*Mei wat* [vɔ́t] hast dyn brief skreaun?"「君のペンで手紙を書いたよ」「何で手紙を書いたんだって」
"*Dyn pinne* ha ik myn brief *mei* skreaun." "*Wat* [vɔ́t] hast dyn brief

mei skreaun?”「同上」

③ 強調形 watte [vɔ́tə]「何（主格・目的格）」

文中ではなく，単独で用いることが多い。

“*Watte*?” sei se en skuorde de mûle wiid iepen.「『何ですって』と彼女は言って，口を真横に大きく開いた」(ULI'S, B 1：12)

☞ -e を伴った一連の強調形に注意。

ikke(← ik)「私（主格）」，ditte(← dit)「これ」，datte(← dat)「それ，あれ」，hjirre(← hjir)「ここに」，dêre(← dêr)「そこに，あそこに」，wêre(← wêr)「どこに」

(c) watfoar [vɔ́tfwar]，wat [vɔt]（[in]＋名詞）「どんな」

後続する名詞の種類にとくに制限はない。可算名詞単数形が後続する場合には不定冠詞 in を伴うことがある（§ 44 (6)）。

Wat (foar) guod is dat?「それはどんな品物ですか」(Zantema 1984：1163)

Wat sykte soe er ha?「彼はどんな病気なのだろう」(ULI'S, A 1：6)

‘watfoar (in)＋名詞’ は動作主を表わす主語である場合を除いて，‘wat... foar (in)＋名詞’ のように wat だけを文頭に置いて，foar 以下と切り離して用いることができることが多い。

Watfoar (in) tydskrift is dat?「それはどんな雑誌ですか」

Wat is dat *foar (in) tydskrift*?「同上」

Watfoar tydskriften hasto kocht?「君はどんな雑誌を買ったのですか」

Wat hasto *foar tydskriften* kocht?「同上」

Watfoar studinten wolle dit boek hawwe?「どんな学生たちがこの本をほしがっているのですか」

* *Wat* wolle *foar studinten* dit boek hawwe?「同上」

(d) hok [hok]「どんな，どの」など

① 語形

hok [hok]，hokke [hɔ́kə]，hokker [hɔ́kər]（← hok＋foar）（＋名詞）「どの，どんな」

hoe'n [hun] (← hoe+in) (+名詞), hokfoar [hǒkfwar] (in) (+名詞)「どんな」

② 後続する名詞の種類

hok, hokke, hoe'n に後続する名詞の種類は sok, sokke, sa'n (§ 41 (2)(b)) の場合と同様に次のとおりである。

可算名詞：hoe'n (+単数形)　　hokke (+複数形)

不可算名詞：hok (+中性名詞単数形)　　hokke (+両性名詞単数形)

hoe'n「どんな」はやや口語的であり,「どの」の意味はない (Tiersma 1985：96)。

hokfoar「どんな」は後続する名詞が可算名詞単数形の場合に hokfoar in のように in を伴うことがある。

hokker「どの, どんな」は後続する名詞の種類に制限がなく, 不定冠詞 in を伴うことはない。

Mei *hokfoar* {*in*/∅} trein komme jimme?「君たちはどの列車で来ますか」

Mei *hokker* {**in*/∅} trein komme jimme?「同上」

'hokfoar (in)+名詞' は 'watfoar (in)+名詞' ((c)) とちがって, *'hok... foar (in)+名詞' のように切り離して用いることはできない。

☞ hokker は元来, 複数属格形であり (古フ. huckera, WFT 9 1992：71), 以上のように hokfoar とは用法が異なる。また, 複数形でも形容詞の語尾 -e がつかない。
mei {*hokker*/**hokkere*} treinen「どの列車で」

(2) 疑問副詞 (it freegjend bywurd)

(a) 種類

hoe [hu] (+形容詞/副詞)「どのように, どれほど」

(yn) hoefier [(in) hufíər]「どの程度」

hoefolle [hufǒlə], hoemannich [humǒnəx, humánəx]「どれほど多く (の)」

hoenear [hunÍər, húnIər]「いつ, どんな場合に」

hoeno [hunó:u], hoesa [husá]「どうして」

hoe'nen(t) [húnən(t)], hoe'n(en)-ien [hún(ən)iən]「どんな人・物事」

wannear [vɔnÍər, vɔ́nIər]「いつ」

wêrom [vɛ:róm, vɛ́:rom]「なぜ」

wêr [vɛ:r] (強調形 wêre [vɛ́:rə])「どこ」

(b) 'wêr... 前置詞', 'wêr-前置詞'

これには疑問副詞の wêr「どこ」とならんで，疑問代名詞の wêr「何」の場合がある。wêr と前置詞は分離するほうがふつうであり，前置詞は文末，あるいは文末の動詞や分離動詞の前綴りの直前に置く。

① 疑問副詞の wêr「どこ」の例

wêr(...)wei [vɛ:r(...)vái, ..vɛ́i, vɛ́:r..]「どこから」

wêr(...)hinne [vɛ:r(...)hÍnə, vɛ́:r..]「どこへ」など。

Wêr komst *wei*?「君はどこからきたのですか」(ULI'S, A 6：15)

Witsto wol *wêrsto* aanst *hinne* moatst?「君はこれからどこへ行くべきかわかっていますか」(ULI'S, C 18：23 変更)

② 疑問代名詞の wêr「何」の例 ((1)(b)②)

wêr(...)fan [vɛ:r(...)fɔ́n, vɛ́:r..]「何から」

wêr(...)njonken [vɛ:r(...)njɔ́ŋkən, vɛ́:r..]「何のそばに」

"*Wêr* giet dat toanielstik *oer*?" "It is in blijspul, mar ik wit net krekt *wêr't* it *oer* giet."「その劇はどんな内容ですか」「喜劇ですが，正確な内容は知りません」(Bangma 1993[2]：130 変更)

§44 疑問文 (de fraachsin)

(1) まとめ

疑問文は平叙文とは異なる文の構成という点から直接疑問文と間接疑問文，疑問詞の有無という点から疑問詞疑問文と選択疑問文に分かれる ((2)(3))。ただし，疑問の意味は平叙文の語順でも表わすことができる ((4))。また，西フリジア語には「あなたはわたしがだれに会ったと思いますか」など

のように，従属文の要素を問う疑問文に 3 つの種類がある ((5))。感嘆文についても触れる ((6))。

(2) 直接疑問文 (de direkte fraachsin)

他の文に従属しない疑問文を直接疑問文と呼ぶ。選択疑問文 (de sinfraach) と疑問詞疑問文 (de wurdfraach) に分かれる。

(a) 選択疑問文 (de sinfraach)

動詞の種類や語形にかからわず定動詞を文頭に置き，ふつう文末のイントネーションを上げて表わす。

Is 't slim mei jim heit?「お父さんの具合は良くないのですか」(ULI'S, A 6：15)

Leardesto ek Frysk op skoalle?「君は学校ではフリジア語も習いましたか」(ULI'S, A 12：18 変更)

Kinne wy it hûs besjen?「家を見てもいいですか」(ULI'S, A 2：13)

Hat it iten dy hjoed wol goed smakke?「今日は食事はおいしかったですか」(ULI'S, B 15：19)

等位接続詞は定動詞の前に置くことができる。

Of geane jo leaver nei de lytse winkeltsjes?「それとも小さい店に行くほうがいいですか」(ULI'S, A 10：8)

(b) 疑問詞疑問文 (de wurdfraach)

定動詞の前に疑問詞あるいは疑問詞を含む文成分を置いて文を始める。

Wa {hat/hawwe} dêr stien?「だれ (単数/複数) がそこにいたのですか」(ULI'S, C 17：19 変更)

{*Wa syn/wa's/waans/wannes*} auto is dit?「これはだれの車ですか」

Wa sines is dit?「これはだれのものですか」

Mei *wa* sil er jûn dûnsje?「彼は今晩だれと踊るのだろう」

Wat tinkt jo fan dizze wize fan advertearjen?「あなたはこの種の広告のしかたをどう思いますか」(ULI'S, B 11：18 変更)

Wat sykte soe er ha?「彼はどんな病気なのだろう」(ULI'S, A 1：6)

Watfoar ferskil soe dat meitsje?「それはどんな違いになるのだろう」(ULI'S, B 11：18 変更)

Wat hat dat no *foar* sin?「それはいったいどういう意味があるのか」(Bangma 1993²：66 変更)

Mei {*hokker* trein/*hokfoar* (in) trein} komme jimme?「君たちはどの(どんな)列車で来ますか」(ULI'S, C 18：23 変更)

Hokker gemeenten binne achterút gien?「どの市町村が衰退したのだろう」(ULI'S, C 10：17)

Hoe ferklearje jo dat?「あなたはそれをどのように説明しますか」(ULI'S, C 10：17 変更)

Hoe let sil dat west hawwe?「それはいつのことだったのだろう」(ULI'S, A 20：7)

Hoefolle winkels binne dêr?「そこには店がいくつありますか」(ULI'S, C 1：15)

Hoe'n strik hast kocht?「君はどんなネクタイを買ったんだ」(Boersma/Van der Woude 1980²：33 変更)

Wannear binne se begûn mei it oanlizzen fan seediken?「いつ人々は堤防の建設を始めたのだろう」(ULI'S, C 11：3 変更)

Wêrom ha jo ús dat net earder ferteld?「どうしてそれをもっと早く私たちに知らせてくれなかったのですか」(ULI'S, C 8：5)

Wêr hat ús mem it presintsje kocht?「お母さんはどこでそのプレゼントを買ったのだろう」(ULI'S, A 1：14)

Wêr docht dat *út* bliken?「それは何からわかるのだろう」(ULI'S, C 11：5 変更)

Wêrtroch ûntstie foarhinne faak in hechter bân tusken de bewenners as hjoeddedei?「何を通じて以前は住民の間で今日よりも強いきずなが生まれることが多かったのだろう」(ULI'S, C 11：3)

(3) 間接疑問文 (de yndirekte fraachsin)

従属文として他の文に組み込まれた疑問文を間接疑問文という。間接疑問文では定動詞を文末に置き，従属文であることを示す補文標識 -t (← dat) などを間接疑問文の種類に応じて下記のように疑問詞の語末に添えるか，疑問詞を含む文成分の直後に置く。

(a) 選択疑問文

oft [ɔt] (← of [ɔf]＋dat)「…かどうか」を文頭に置く。oft のかわりに，口語的な文章では発音どおりにつづった at [ɔt] を用いる。

Sy seach {*oft/at*} it goed wurke.「彼女はそれがうまくいっているか調べた」(ULI'S，B 1：18 変更)

Ik woe freegje {*oft/at*} jo my helpe koene.「手を貸していただけるかお聞きしたいのですが」(ULI'S，B 1：24 変更)

(b) 疑問詞疑問文

疑問詞が独立用法か限定用法かによって次の 2 種類に分かれる。

① 疑問詞が独立用法の場合

疑問詞の語末に補文標識 -t (← dat) を添え，全体で 1 語でつづる。ただし，wat のように語末音が t で終わる語はそのまま (wat ← wat-t ← wat dat)。

Beppe wit krekt *wannear't* it in bern syn jierdei is.「祖母は子供の誕生日がいつかちゃんと知っている」(wannear't ← wannear dat)

次の用例のように '疑問詞＋oft/at' を用いて表わすこともできる。ただし，'疑問詞＋t' ほど一般的ではない。

Ik wit net *wannear oft* er komt.「私はいつ彼が来るか知らない」(Van der Meer 1991 b：44)

その他の用例。

Ik wit net mei *wa't* er juster dûnse hat.「私は彼が昨日だれと踊ったか知らない」(wa't ← wa dat)

Hast eltsenien wit *wat* dat wurd betsjut.「その語がどういう意味かはほとんどだれでも知っている」(wat ← wat dat)

Hoe't soks komt, is net maklik te sizzen.「どうしてそんなことになるのかは簡単には言えない」(hoe't ← hoe dat) (ULI'S, C 20 : 3)

Wêrom't ik dêr sa lang oan wurkje moatten ha, wit ik sels ek net. (wêrom't ← wêrom dat)「なぜ私がその仕事にそんなに長い時間をかけなければならなかったか私自身わからない」(ULI'S, B 19 : 25 変更)

Wêr'tst no wennest, is my net bekend.「君がどこに住んでいるか私は知らない」(wêr'tst ← wêr dat-st) (Boersma/Van der Woude 1980[2] : 30)

Oant yn de lytste ûnderdieltsjes wurdt foarskreaun *wêr't* in wente *oan* foldwaan moat.「ときにはごく細部に至るまで住居がどの点を備えるべきか指示されている」(wêr't ← wêr dat) (ULI'S, C 20 : 4 変更)

② 疑問詞が限定用法の場合

疑問詞を含む文成分の直後に oft/at (または as) を置くのが一般的である。ただし，かならず置かなくてはならないということではない。'疑問詞を含む文成分＋t' は書き言葉を除いてあまり好まれない。

Ik wit net {*hoe lang oft*/*hoe lang't*/*hoe lang* Ø} it duorje sil.「私はそれがどのくらい続くか知らない」(Van der Meer 1991 b : 44 変更)

本来，疑問詞とその他の成分との合成語である hokker「どの，どんな」(← hok＋foar) は独立用法「どれ，どんなもの」でも hokker {oft/at} とし，*hokker't とはしない。同様に，hoe'n「どんな」(← hoe＋in) の独立用法である hoe'nen「どんなもの」も hoe'nen {oft/at} とし，*hoe'nen't とはしない。

その他の用例。

Hy wit krekt, *hokker punten oft* er al neame moat en *hokker oft* er net neame hoecht.「彼はどの点を挙げるべきか，またどの点は挙げる必要がないかをよく知っている」(ULI'S, C 20 : 5)

Do witst net heel, fanke, *hoefolle jild ast* besparje kinst ast it boad-

skipjen wat planmjittich oanpakst.「おや，おまえはちゃんと計画的に買い物をすれば，どれだけお金を節約できるか，まったくわかっていないねえ」(ast ← at-st)（Bangma 1993[2]：83 変更）

Ik trêde it lân ut en berekkene *hoefolle lânsomgongen as* ik meitsje moast.「私は土地の広さを歩いて測り，耕作するのに何回往復が必要か計算した」(ULI'S，B 20：6)

It liket of wit er noch net krekt *hokker spesjalist* Ø er it earst rieplachtsje sil.「どうも彼はどの専門医にまずかかるべきか，まだわかっていないようだ」(ULI'S，B 6：8)

It komt der net op oan *hoe âld* Ø men is, mar *hoe't* men âld is.「どれだけ年をとっているかではなく，どのように年をとっているかが肝心だ」(Beintema 1990：10)

☞ オランダ語では'疑問詞＋従属文'がふつうだが，口語では'疑問詞＋{dat/of/of dat}＋従属文'という表現も見られる。

Kun je me zeggen *waar dat* hij woont?「彼がどこに住んでいるか教えてくれますか」(Donaldson 1987[3]：191)

Ik weet niet *waar of* ze de bruiloft willen houden.「私は彼らがどこで結婚式を挙げたいと思っているのか知らない」(ib. 191)

Ik weet niet *wat of* ze kan doen.「私はあの人たちに何ができるか知らない」(ib. 186)

Ik weet niet *wie of dat* er zal komen.「私はだれが来るのか知らない」(ib. 186)

(4) その他の疑問文

疑問の意味は以上のほかにもさまざまに表現できる。

(a) 平叙文疑問文

相手の意図や事実の真偽などを確認するには，平叙文の語順で文末のイントネーションを上げて表現する。

Do fytstest allinnich fan Snits nei Sleat?「君はひとりでスニツ（オ．Sneek スネーク）からスレアト（オ．Sloten スローテン）まで自転車で行ったというのか」(ULI'S，C 5：8 変更)

It leit fêst lekker sa ûnder de tekkens, of net soms?「そうやって毛布にくるまっているのはさぞ気持ちがいいだろう，ちがうかね」(ULI'S，A 20：7)

Hy sil dochs waarm miel iten ha moatte?「だって彼は暖かい食事をとらなければならなかったのでしょう」(ULI'S，B 20：22 変更)

(b) 問い返し疑問文（de echo-fraachsin)

相手の言ったことをそのまま繰り返して聞き返すいわゆる「問い返し疑問文」では，疑問詞は文頭に置かれずに文中にとどまったままである。

"Juster wie ik yn Harns." "Do wiest wêr?"「昨日ハーンス（オ．Harlingen ハルリンゲン）に行ってきたよ」「どこに行ってきたって？」

(5) 従属文に含まれる要素を問う疑問文

西フリジア語には従属文に含まれる要素を問う疑問文に次の 3 種類がある。このうちどれをもっとも好んで用いるかは話者によって異なる。

① 直接問うべき従属文の要素を疑問詞として主文の文頭に置き，従属文の先頭に従属接続詞（補文標識）dat を置くもの

Wa tinke jo *dat* ik sjoen haw?「あなたは私がだれに会ったと思いますか」(Hiemstra 1986：99，以下①②③の用例も同様)

Wa tinke jo *dat* my sjoen hat?「あなたはだれが私に会ったと思いますか」

Wêr tinke jo *dat* Jan wennet?「あなたはヨンがどこに住んでいると思いますか」

② 直接問うべき従属文の要素を疑問詞として主文の文頭に置くとともに，従属文の先頭にもそれと同じ疑問詞を置くもの

Wa tinke jo *wa't* ik sjoen haw?「同上」

Wa tinke jo *wa't* my sjoen hat?「同上」

Wêr tinke jo *wêr't* Jan wennet?「同上」

③ 主文の文頭に wat を置き，直接問うべき従属文の要素を疑問詞として従属文の文頭に置くもの

Wat tinke jo *wa't* ik sjoen haw?「同上」

Wat tinke jo *wa't* my sjoen hat?「同上」

Wat tinke jo *wêr't* Jan wennet?「同上」

☞ 上記のような疑問文が可能なのは，tinke「…と思う」などのように，従属文の内容がはっきり事実と確認できない述語の場合である。witte「…ということを知っている」などのように，従属文の内容がはっきり事実と確認できる述語の場合には不可能である。

☞ ①はオランダ語，ドイツ語，英語の標準語でも見られる構文である。ただし，従属文の主語を問う疑問文は一般にあまり好まれない。

オ．?*Wie* denkt u *dat* mij heeft gezien?「あなたは私がだれに会ったと思いますか」

ド．?*Wer* glauben Sie *daß* mich gesehen hat?「同上」

エ．*Who* do you think {?*that*/∅} has seen me?「同上」

③は日本語でたとえば「あなたは私がだれに会ったかということについてどう思いますか」と訳すことで理解できる。②は英語，ドイツ語，オランダ語の標準語には見られない構文である。

(6) 感嘆文 (de útroppende sin)

疑問詞疑問文はそのままの形でイントネーションを変えれば，感嘆文として用いることができる。

Heitelân, *hoe moai* bisto!「祖国よ，なんとおまえは美しいことか」(P.J. Troelstra)

wat は hoe のように形容詞とともに副詞的に用いて「なんと（…だ）」という意味を表わす。

Wat spitich dat hy net komme kin!「あの人が来られないとはなんと残念な」(ULI'S，A 17：13)

☞ 疑問文としては 'hoe＋形容詞' のかわりに 'wat＋形容詞' を用いることはできない。

{*Hoe*/**Wat*} *let* sil dat west hawwe?「それはいつのことだったろう」

'wat＋形容詞' は 'wat..形容詞' のように分離することがある。

Wy ha lêsten noch op reis west. Nei It Amelân. *Wat* is 't dêr *moai*!「この前みんなで旅行に行ってきたよ。エト・アーメローン島（オ．

Ameland　アーメラント島）にね。あそこはなんとすてきなところだろう」(ULI'S, A 19：7)

wat はまた，名詞とともに限定的に用いて「なんという（…だ）」という意味を表わす。不可算名詞や名詞複数形とともに用いることもできる（§ 43 (1)(C)）。

Minsken, minsken *wat in* jild!「やれやれ，なんという大金だ」(ULI'S, A 2：14)

Wat in snie!「なんという雪だ」(Zantema 1984：1163)

Wat in auto's!「なんという車（複数形）だろう」(ib. 1163)

wat はさらに動詞とともに副詞的に用いて「なんと（…か）」という意味を表わす。

Wat moast ik *laitsje*!「なんと笑ってしまったことか」(ib. 1163)

このように wat は感嘆文であることを示す指標として広く用いる。

§ 45　関係詞（it betreklik foarnam- en bywurd）

(1)　はじめに

関係詞には関係代名詞と関係副詞があり，主語，目的語，副詞成分などの文法関係は関係文における役割で決まる。関係代名詞の性と数は先行詞に一致し，主格と目的格の区別はない。関係詞は間接疑問文の疑問詞と同様に補文標識 -t（← dat）を伴う（ただし，dat，wat のように語末音が t で終わるものはそのまま）。以下では便宜上，関係代名詞と関係副詞を扱う。

関係文には先行詞（it antesedint）を伴うものと伴わないものがある。先行詞を伴わない関係文は対象を限定せず，一般的な意味で用いる。

関係詞は関係文の前に置く。関係文は関係詞に続く従属文であり，定動詞は文末に置かれる。関係文はふつう先行詞の直後に置かれるが，伝達上の理由などで先行詞から離れた後ろの位置に外置されることがある。

Men moat net *alles* sizze, *wat men wit*, mar wol *alles* witte, *wat men seit*.「知っていることはすべて言う必要はないが，言うことはすべて知っていなくてはならない（ことわざ）」(Beintema 1990：10)

関係文の終わりには正書法でコンマ（,）を添えることが多い。関係文のはじめにはいわゆる「制限用法」(it beheinend gebrûk) ではコンマを添えず，いわゆる「継続用法」(it útwreidzjend gebrûk) では添えることが多い。ただし，コンマの使用は文の構造を明確にする手段であり，つねに厳格に守られるわけではない。

英語と違って西フリジア語では関係詞は省略できない (Sjölin 1988：109)。

Dit is de kwestje {*dy't*/*∅} wy hjoed beprate wolle.「これが私たちが今日論じたいと思っている問題です」

Dit is de kwestje {*dêr't*/*∅} wy hjoed oer prate wolle. (← dêr't...oer)「同上」

'前置詞＋関係代名詞' や関係詞が限定用法として用いられて他の文成分が後続する場合には，補文標識 -t のかわりに oft (← of dat) を伴うことがある。とくに後者の場合は oft が一般的である。

Dit is de frou {*dy't*/**dy oft*} ik juster sjoen ha.「これが私が昨日会った女性です」

Dit is de frou {*mei wa't*/*mei wa oft*} ik juster praat ha.「これが私が昨日言葉を交わした女性です」

Dit is de frou {**dy har broer't*/*dy har broer oft*} dearekke wie.「これが兄弟を殺された女性です」

(2) 関係代名詞 (it betreklik foarnamwurd)

個々の語形と用例を示す。

(a) dy't [dit] (← dy dat)

前置詞とともには用いない。

① 先行詞の名詞句が複数形および両性単数形の場合

Yn in boek wurdt ferteld oer *saken dy't* josels soms meimakke hawwe.「書物の中にはときにはあなた自身が体験した事柄が語られていることがある」(A 16：7)

Hja geat in tsjettel siedend wetter yn *in tobbe dy't* yn 't portaal klear stie.「彼女は玄関に用意しておいた桶の中に煮え立ったやかんのお湯を注いだ」(ULI'S, B 2：13 変更)

② 先行詞を伴わない関係文で「(およそ) …する人」を意味する場合

(c)③の wa't と同様の用法。単数形としても複数形としても用いる。

i) 単数形

Dy't in bulte begrypt, kin in bulte ferjaan.「多くを理解する者は多くを許せる (ことわざ)」(Beintema 1990：14)

Dy't skriuwt, *dy't* bliuwt.「書く者は長らえる (＝書く人，それすなわちとどまる人。ことわざ)」(Beintema 1990：123 変更)

ii) 複数形

Dy't gjin kaart krigen hawwe, meie frij folgje, as se dat wolle.「券をもらわなかった人たちも，その気があれば，もちろん参列してかまわない」(ULI'S, B 1：9 変更)

(b) dat [dɔt] (← dat dat)

前置詞とともには用いない。

① 先行詞の名詞句が中性単数形の場合

Ynflaasje is *in wurd dat* hjoeddedei gauris brûkt wurdt.「インフレーションは今日，頻繁に用いられる用語だ」(ULI'S, C 20：3 変更)

In jiermannich lyn wie der by uzes *in jonkje* útfanhûs, *dat* in jier twa-trije yn Den Haach wenne hie.「数年前，私たちの家に 2，3 年ほどデン・ハーハ (オ. Den Haag) で暮らした男の子が泊まったことがあった」(Tamminga 1973：212)

② 先行詞が wat などの不定代名詞の場合

Hy sil faaks wol *wat* fine *dat* der wat op liket.「彼はそれに少し似ている何かを見つけるかもしれない」(ULI'S, C 11：7 変更)

(c) wa't [va:t] (← wa dat)

① 先行詞が al [ɔl]「すべての人」の場合

Al wa't dat wol, mei der oan meidwaan.「それをしたい人はいっしょ

にやってもいい」

☞ 次の表現に注意（§ 42 (3)(a)②）。
{*Alle wa't/Alle dy't/Allegear(re) dy't*} dat wolle, meie der oan meidwaan.「同上」

② 先行詞を伴う関係文で人を意味する名詞句として前置詞とともに用いる場合：'前置詞＋wa't'

De frou mei wa't er juster dûnse hat, is myn dochter.「彼が昨日いっしょに踊った女性は私の娘だ」

③ 先行詞を伴わない関係文で「（およそ）…する人」を意味する場合
(a)②の dy't と同様の用法。単数形としても複数形としても用いる。

i) 単数形

Bûter, brea en griene tsiis, *wa't* dat net sizze kin, is gjin oprjochte Fries.「bûter（バター），brea（ライ麦パン），griene tsiis（青かびチーズ），これを言えない者は本当のフリジア人ではない（早口言葉）」

ii) 複数形

Wa't al te hastich trouwe, kin 't al te gau berouwe.「早まって結婚する者は後悔するのも早い（ことわざ）」（kin は kinne の -e がリズムの関係で脱落したもの）（Beintema 1990：57）

(d) wat [vɔt]（← wat dat）

① 先行詞が alles [ɔ́ləs]「すべて」，itselde [ətsɛ́ldə]「同じもの」の場合

Alles wat op ierde libbe, ferdronk.「地上で生きていたすべてのものが溺れ死んだ」（De Arke fan Noach）

Alles wat libbet/Docht der no sines by.「生きているものはすべて，今，それに加わる（＝それに付随して自らのことを行なう）」（Waling Dykstra: 'Simmermoarn'）

Ik nim *itselde watsto* nimst.「私は君がもらうものと同じものをもらいます」（Bangma 1993²：132）

☞ オランダ語との相違に注意。
フ．Ik nim *itselde* {*watsto*/**datsto*} nimst.「同上」

オ．Ik neem *hetzelfde* {**wat jij/dat jij*} neemt.「同上」

② 先行詞が文全体の場合

De minsken harken net nei God en tochten allinne oan harsels, wat God tige fertriette.「人間たちは神の語ることに耳を傾けず，自分たちのことばかり考えた。そのことで神はいたく心を痛められた」(De Arke fan Noach 変更)

③ 先行詞を伴わない関係文で「(およそ) …である物事」を意味する場合

Wat men dronken docht, moat men nochteren betelje.「酔っ払ってすることにはしらふで支払わなければならない（ことわざ)」(Beintema 1990：29)

De minsken harken net nei *wat* God fertelde.「人間たちは神が語ったことに耳を傾けなかった」(De Arke fan Noach 変更)

(3) 関係副詞 (it betreklik bywurd)

関係副詞は場所や時の副詞句を表わす。ただし，dêr't [dɛ(:)t] には場所の意味を表わす関係副詞のほかに，関係代名詞として前置詞句とともに用いる用法があり，便宜上，以下で説明する。

(a) dêr't [dɛ(:)t] (← dêr dat)：場所を表わす関係副詞

① 先行詞を伴う関係文で用いる場合

Op *de souder*, *dêr't* se ornaris sliepte, wie 't om distiid fierste kâld.「彼女がふだん寝ていた屋根裏部屋はこの時期とても寒かった」(ULI' S，B 2：14 変更)

② 先行詞を伴わない関係文で「(およそ) …するところ」を意味する場合

Dêr't hout kappe wurdt, falle spuonnen.「木が切られるところではおがくずが落ちる（＝決定は犠牲を伴う。ことわざ)」(Beintema 1990：127 変更)

Dêr't bijen binne, is ek huning.「蜂がいるところには蜜もある（＝働けば報いがある。ことわざ)」(Beintema 1990：24)

(b) dêr't [dɛ(:)t] (← dêr dat)：前置詞句とともに用いる関係代名詞

① 先行詞の種類と語順

先行詞は物事を意味するものが一般的である。

語順はふつう前置詞を dêr't から分離し，文末や，文末の動詞あるいは分離動詞の前綴りの直前に置く。ただし，論理関係や付帯状況のように動詞と意味的な結びつきが薄い場合を除く。

Dit is *it mes*, *dêr't* ik de griente *mei* snien ha.「これが私が野菜を切った包丁です」(← dêr't...mei) (ULI'S, B 19：25 変更)

☞ オランダ語 (waar) との相違に注意。

フ. it wurk *dêr't* se hielendal net *fan* hâldt「彼女がまったく好きでない仕事」(ULI'S, B 19：19)

オ. het werk *waarvan* ze helemaal niet houdt「同上」(ib. 19 変更)

名詞句が人を意味する場合には '前置詞＋wa't' ((2)(c)②) が一般的だが，口語では 'dêr't... 前置詞' も用いる傾向がある (§ 43 (1)(a)②)。

de frou, *dêr't* hy juster *mei* praat hat「彼が昨日（その人と）話をした女性」(← dêr't...mei) (ULI'S, B 19：25)

De frou dêr't er *mei* troud is, is tsien jier jonger.「彼が結婚した女性は 10 才年下だ」(← dêr't...mei) (Van der Woude 1981：177)

② 先行詞を伴う関係文で用いる場合

It wenjen yn *sa'n earmoedige behuzing*, *dêr't* hast gjin frisse lucht *yn* komme koe, makke, dat in protte sykte en stjerte it gefolch wie.「新鮮な空気がほとんど入れないようなみすぼらしい住居での暮らしは，多くの病気と死をもたらす結果になった」(← dêr't...yn) (ULI'S, C 20：4 変更)

Eltsenien kin oan 'e weet komme fan *alle dingen*, *dêr't* men graach wat mear *fan* witte wol.「だれでももっと知りたいと思うことはすべて知ることができる」(← dêr't...fan) (ULI'S, C 20：6 変更)

③ 先行詞を伴わない関係文で「(およそ) …である物事」を意味する場合

Dêr't men *foar* útgiet, moat men jin ek foar klaaie.「出向く用事には

身支度をしなければならない（＝引き受けたことは責任をもって果たさなければならない。ことわざ）」（← dêr't...foar）（Beintema 1990：137 変更）

Dêr't neat *fan* oan is, komt ek gjin praat fan.「何もないことに噂は立たない。ことわざ」（← dêr't...fan）（Beitema 1990：112）

(c) wêr't［vɛ(:)t］（← wêr dat）：場所を表わす関係副詞

先行詞を伴わない関係文で「（およそ）…するところ」を意味する。

Wêr't it geweld begjint, hâldt it rjocht op.「暴力が始まるところでは正義が途絶える（＝無理が通って道理ひっこむ。ことわざ）」（Beintema 1990：51）

(d) 'wêr- 前置詞 -t'：前置詞とともに用いる関係代名詞

例外的に分離しないで用いる。論理関係や付帯状況を表わす副詞（以下の用例では dêrtroch「それを通じて，そのために」，dêrby「そのさいに」）の関係詞化に相当し，オランダ語の影響と考えられる（§ 46 (2)(b)）。

① 先行詞が名詞句の場合

Neam *inkelde punten wêrtroch't* de doarpen en stêden hjoeddedei nei mekoar ta groeie.「こんにち，（ソレヲ通ジテ）村と町がたがいに接近してきている点をいくつか挙げなさい」（← wêr-troch dat）（ULI'S, C 11：3）

Meitsje ek *in ferdieling fan beroppen yn groepen, wêrby't* jo útgeane fan it plak dêr't jo meastal arbeidzje.「（ソノサイニ）主として働く場所を基準にした職業のグループ分けもやってみなさい」（← wêr-by dat）（ULI'S, A 13：10）

② 先行詞が文全体の場合

Dêrby komt dan noch *dat dy lucht frij rêstich is, wêrtroch't* de ûntwikkeling fan it delslachproses net folle beynfloede wurde kin en stadich trochgean kin.「そのさい，さらに大気の流れがかなり遅く，このため降雨の経過はそれほど影響を受けることなく，徐々に雨が降るようになるでしょう」（← wêr-troch dat）（Bangma 1993²：112）

(e) doe't [dut] (← doe dat), wannear't [vanĺət] (← wannear-dat)
時間を表わす関係副詞として用いる。

① doe't
過去の特定のできごとに用いる。
Mannich klaaidoarp is ûntstien yn 'e tiid, *doe't* der noch gjin seediken wiene.「クラーイ地方（フリースラント北部の粘土質地域）の村の多くはまだ堤防がなかった時代にできた」(ULI'S, C 11：2 変更)

② wannear't
①以外の場合に用いる。
Soe de tiid noch komme, *wannear't* it Frysk de wrâldtaal wurdt?「フリジア語が国際語になる時代は来るだろうか」

③ その他の表現
接続詞 dat を用いて表現することもある。上記の①と②の用例の doe't と wannear't はすべて dat で置き換えることができ，次の用例では tiden「時代（複数形）」の内容を説明する従属文を導入している。
Der ha tiden west, *dat* boufergunnings en -foarskriften folslein ûnbekend wiene.「建築許可および基準がまったく知られていなかった時代があった」(ULI'S, C 20：3)
Der ha tiden west, *dat* it stedfolk delseach op it doarp.「都会の人々が村を見下していた時代があった」(ULI'S, C 1：14)
De beide kearen *dat* in rivier myn paad krûste, hâlde ik dan ek midden op 'e brêge.「川が道を横切ったその 2 回とも，私は橋の上で立ち止まった」(ULI'S, B 20：15 変更)

(4) 'sa't [sat] (...) 指示代名詞'

指示代名詞が先行する名詞を指す場合，'sa't (...)＋指示代名詞'「…のような…」(sa't ← sa dat) という表現は関係代名詞に近い役割を果たすことがある。

Sûn iten *sa't* wy *dat* no kenne, wie der net by.「私たちが今知っている

ような健康な食事はなかった」(ULI'S, B 11：9)

Net dat ús flagge, *sa't* wy *dy* kenne, fan dy tiid is.「私たちが知っているような旗がその時代のものというわけではない」(ULI'S, C 20：8)

§46 関係文 (de betreklike bysin)

(1) 分類

関係文の分類を行ない，対応する関係詞を示すと次のようになる。

(a) 関係代名詞

先行詞あり：	中性名詞単数形以外	dy't
	中性名詞単数形	dat
	al	wa't
	文全体，alles, itselde	wat
	前置詞とともに人を示す場合	前置詞＋wa't
		(dêr't(...)前置詞)
	前置詞とともに物事を示す場合	dêr't(...)前置詞
		wêr-前置詞-' t
先行詞なし：	人	dy't, wa't
	物事	wat

(b) 関係副詞

先行詞あり：	場所	dêr't
	時間	doe't, wannear't, (dat)
先行詞なし：	場所	dêr't, wêr't

(2) dy't と wa't; dêr't と wêr't

(a) 共通点

dy't と wa't および dêr't と wêr't はそれぞれともに用いることができる場合があり，区別が微妙である。

i) *Dy't* oan boat is, moat meifarre.「船に乗っている者はいっしょに航海しなければならない（＝乗りかかった船。ことわざ)」(Beintema

1990：20 変更)

Wa't farre wol, moat stoarmen noedzje.「海に出ようと思う者は嵐にあうことを覚悟しなければならない」(Beintema 1990：35)

Wa wit it antwurd? *Wa't* it wit, mei de finger opstekke.「だれが答えがわかりますか。答えがわかる人は手をあげてください」(Stienstra 1982：46)

ii) *Dêr't* ljocht is, dêr moat ek skaad wêze.「光があるところには陰もなければならない(=何事にも長所と短所がある。ことわざ)」(Beintema 1990：121)

Wêr't gjin ear is, is gjin sear.「耳がないところでは痛みがない(=知らぬが仏。ことわざ)」(Beintema 1990：32)

上記の用例の dy't と wa't それに dêr't と wêr't はたがいに置き換えることができる。

本来の西フリジア語的な語形はd- 系のdy't, dêr'tであり，w- 系のwa't, wêr't はオランダ語の影響による。両者をともに用いることができる場合，一般に dy't, dêr't のほうが使用頻度が高い。したがって，使用できる可能性が両方ある場合には dy't, dêr't を用いればいい。

☞ 西フリジア語のことわざを集めた Beintema (1990) では dy't, dêr't に比べて，wa't, wêr't を用いた用例が著しく少ない。

(b) dêr't と wêr't の相違点

dêr't と wêr't は次の点で相違するという指摘がある。すなわち，Bosma-Banning (1981[2]：117) は dêr't は場所が特定の場合，wêr't は場所が不特定の場合に用いると述べている。

Wêr sille hja wenje?「彼らはどこに住むだろうか」

–Dêr't er berne is.「生まれたところさ」(特定)

–Wêr't mar plak is.「住む場所があるところさ」(不特定) (ib. 117)

たしかにこの傾向はあるが，かならずしも明確に区別されているわけではない。

一方，§45(3)(d)で挙げた次の用例のように，前置詞とともに分離せずに用いる場合にはw-系だけが可能である。これはオランダ語（オ．waardoor, waarbij）の影響と考えられる。

Neam inkelde punten {*wêrtroch't/*dêrtroch't*} de doarpen en stêden hjoeddedei nei mekoar ta groeie.「こんにち，（ソレヲ通ジテ）村と町がたがいに接近してきている点をいくつか挙げなさい」(ULI'S, C 11：3 変更)

Meitsje ek in ferdieling fan beroppen yn groepen, {*wêrby't/*dêrby't*} jo útgeane fan it plak dêr't jo meastal arbeidzje.「(ソノサイニ）主として働く場所を基準にした職業のグループ分けもやってみなさい」(ULI'S, A 13：10)

☞ 最近の学生はdêr'tのかわりにwêr'tを多用する傾向があり，これもオランダ語の影響と考えられる。

参考文献

(前回までに掲載したものを除く)

Bibel. Ut de oanspronklike talen op 'e nij yn it Frysk oerset. 1989² (1978). Haarlem. Nederlands Bijbelgenootschap/Boxtel. Katholieke Bijbelstichting.

Braren, E./O. Wilts/B. Sjölin. 1988². *Fering för beganern: Programmierter Lehrgang des Föhrer Friesisch.* (*Didactica Frisica* 1). Kiel. Nordfriesische Wörterbuchstelle der Christian-Albrechts-Universität Kiel.

De Boer, R. 1985/1986. "Ien en oar oer de oansprekfoarmen yn it Nijfrysk (I)-(VII)". *De Pompeblêden.* 56/57. (I) 1985: 264-265. (II)- (VII): 1986[(II) 8-9, (III) 25-27, (IV) 44-45, (V) 56-57, (VI) 72-73, (VII) 111-113] .

De Haan, Ger J. 1983. "The position of the finite verb in Frisian". In: *Friserstudier* III. 37-48.

De Haan, Germen J. 1994. "Inflection and cliticization in Frisian *-sto, -ste, -st*". *NOWELE*. 23. 75-90.

De Vries, Jan. 1987 (1971). *Nederlands etymologisch woordenboek*. Leiden. Brill.

Donaldson, 1987³: *Dutch reference grammar*. Leiden. Martinus Nijhoff.

Fort, Marron C. 1980. *Saterfriesisches Wörterbuch: mit einer grammatischen Übersicht*. Hamburg. Buske.

Hiemstra, Inge. 1986. "Some aspects of Wh-questions in Frisian". *Friserstudier*

IV/V. 97-110.

Hoekema, Teake. 1989. "It fergetten relativum *dy'tst* [dist] en de relaasje tusken pronominaal antesedint en relative bysin". *Us Wurk: Tydskrift foar frisistyk* 38. 141-144.

Hoekstra, Jarich. 1989. "Bywurden fan tiid op *-s*". *Tydskrift foar Fryske Taalkunde* 5. 1-32.

Hoekstra, Jarich. 1995. "Pronoun and Case. On the distribution of Frisian *harren* and *se* 'them'". *Leuvense Bijdragen* 83. 47-65.

Hoekstra, Jarich/Láslő Marácz. 1989a. "Some implications of I-movement in Frisian". In: Hans Bennis/Ans van Kemenade (eds.). *Linguistics in the Netherlands 1989*. Dordrecht. Foris. 81-90.

Hoekstra, Jarich/Láslo Marácz. 1989b. "On the position of inflection in West-Germanic". *Working Papers in Scandinavian Syntax* Vol.44. 75-88.

Hoekstra, Jarich/Peter Meijes Tiersma. 1994. "Frisian". In: Ekkehard König/ Johan van der Auwera (ed.). *The Germanic Languages*. London /New York. Routledge. 505-531.

It Nije Testamint. Ut it Gryksk oerset yn it Frysk fen Dr. G. A. Wumkes. 1933. Amsterdam. Nederlandsch Bijbel Genootschap.

Krol, Jelle. 1985. "It pronomen *men* yn it skreaune Frysk oant 1950". *Us Wurk: Tydskrift foar frisistyk*. 34. 1-36.

清水 誠. 1992.「北フリジア語モーリング方言 (1). 文法. ── V. Tams Jørgensen. "Kort spräkeliir foon dåt mooringer frasch" 訳注 ──」. 北海道大学文学部紀要 40-3. 第 74 号. 65-162.

Spenter, Arne. 1970. "Zur Genuskategorie im Neuwestfriesischen". In: *Flecht op 'e koai. Stûdzjes oanbean oan Prof. Dr. W. J. Buma ta syn sechstichste jierdei*. Grins. Wolters-Noordhoff. 182-188.

Stienstra, J. 1978. *Taalboek foar trochsetters*. Ljouwert. AFUK.

Stienstra, J./G. de Vries/J. W. de Vries. 1982. *De stipe*. Ljouwert. AFUK.

Van der Mear, Geart. 1991a. "The 'conjugation' of subclause introducers: Frisian *-st*". *NOWELE* 17. 63-84.

Van der Meer, Geart. 1991b. "The subclause signal *'t* in Frisian: Its origin and function". *Leuvense Bijdragen* 80. 43-59.

Van Ginneken, J. 1939. "De vervoeging der onderschikkende voegwoorden en voornaamwoorden". *Onze Taaltuin* 8. 1-11.

Van Haeringen, C. B. 1939. "Congruerende voegwoorden". *Tijdschrift voor Nederlandse taal- en letterkunde*. LXIII. 215 vlgg. (*Nederlandica*. 1949. 's-Gravenhage. D. A. Daamen's Uitgevermaatschappij N. V. 246-259. 再録)

Visser, W. 1985. *Frysk Wurdboek. Nederlânsk-Frysk*. Drachten/Ljouwert. Osinga/Fryske Akademy.

Walker, A./B. Sjölin. 1986. *Frasch for önjfangere: Programmierter Lehrgang des Föhrer Friesisch*. (*Didactica Frisica* 2). Kiel. Nordfriesische Wörterbuchstelle der Christian-Albrechts-Universität Kiel.

＊本稿は筆者の以下の論文に続く西フリジア語の文法構造の記述である。
「西フリジア語の音韻と正書法 (1)」(北海道大学文学部紀要　44-1. 第 85 号. 1995. 37-81)
「西フリジア語の音韻と正書法 (2)」(北海道大学文学部紀要　44-2. 第 86 号. 1995. 43-111)
「西フリジア語の文法構造―冠詞，名詞，形容詞―」(北海道大学文学部紀要 45-1. 第 88 号. 1996. 21-81)
記述上の問題点については筆者の次の論文を参照。
「西フリジア語文法記述の問題点」(北海道大学文学部紀要　44-3. 第 87 号. 1996. 41-107)

＊本稿は平成 8 年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。
研究課題：「連続性概念による言語モデルの再構築 ── ドイツ語学の立場から ──」. 基盤研究(B)(2). 課題番号 08451101 (研究代表者　北海道大学言語文化部助教授　佐藤俊一)